第68次印旛地区教育研究集会
（社会科教育・中学校）

研究主題

考えを深める社会科学習の在り方

～逆向き設計論とリフレクションの充実を通して～

＜要旨＞

1．主題設定の理由

新学習指導要領では，「主体的・対話的で深い学び」が求められている。しかし，生徒の授業のまとめや振り返りをみると，「〇〇州のことがわかった。」「楽しかった。」といった具体性に欠ける記述や単なる感想になることが多く，理解や思考の深まりを感じることができなかった。そこで，生徒が学習内容を相互に関連付け，多面的・多角的に考察して考えを深められる社会科学習の在り方を研究したいと考え，本主題を設定した。

2．研究仮説

―仮説１―

「逆向き設計論」に基づく単元計画を立て，「パフォーマンス課題」を設定することで，生徒が知識，技能を活用する場面が増え，学んだことを相互に関連付けた理解が深まるだろう。

―仮説２―

単元の中に「リフレクション」を位置づければ，生徒が社会的事象を多面的，多角的に考察し，思考を深めることができるだろう。

3．研究内容

〇地理的分野「世界から見た日本の姿」「九州地方」「中国・四国地方」単元での授業実践

①「パフォーマンス課題」の提示と毎授業での意識づけ

②さまざまな「リフレクション」の実施

4．結論

―検証―

生徒の作品（記述内容）の変容とアンケート調査から検証を行った。

―成果―

①パフォーマンス課題に取り組むことで，学習内容を結びつけた記述が増え，根拠をもって意見を考えたり，説明したりする力を高めることができた。

②さまざまなリフレクションに取り組むことで，多様な意見を取り入れ，自身の考えを振り返る中で考えを深めることができた。

成田市立遠山中学校
柴田　直樹

研究主題

考えを深める社会科学習の在り方 ～逆向き設計論とリフレクションの充実を通して～

1，主題設定の理由

（1）学習指導要領等から

本研究は，中学校学習指導要領の社会科第２章［地理的分野］の目標（2）「日本や世界の地域の諸事象を位置や空間的な広がりの中でとらえ，それを地域の規模に応じて環境条件や人間の営みなどと関連付けて考察し，地域的特色や地域の課題をとらえさせる」に関連している。特に，地域の課題をより深くとらえるためには，「地域の諸事象」を「環境条件や人間の営みなどと関連付けて」，「多面的，多角的」に考察する必要がある。そこで，グループワークや発表会を多く取り入れて意見の交流を図る必要がある。

また，新学習指導要領においては，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められている。生きて働く知識・技能を身につけ，それを生かしながら課題を解決していくためには，単元を通して育みたい生徒の姿を具体化した上で，授業において知識・技能を活用し，考える場面を設定することが必要である。

（2）印教研研究主題から

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習 ～自ら課題を見いだし，自らの考えを表現できる児童生徒の育成をめざして～

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新が社会を変化させる今日，一人一人が持続可能な社会の担い手として，よりよい社会の実現に寄与する必要がある。しかし，複雑にからみあった社会問題をひもとき，課題の解決策等を考え，表現することは容易ではない。そこで，学んだ社会的な事象を結びつけながら，自分の考えを深める場面の充実を図ることが必要である。

（3）生徒の実態から（資料編 P.12）

生徒は，2017 年度入学，現２年生を対象とする。入学当初のアンケートでは，自分の考えを文章で書き，発表することが好きではないと答える生徒が６割を超えていた。そこで，2017 年度より，単元のまとめの「リフレクション」（学習の振り返り活動）の一貫として，学習の自己評価とともに，わかったことや考えたことをまとめさせてきた。

しかしながら，生徒のまとめを見ると，「アフリカ州のことがわかった。」「調べるのが楽しかった。」という感想のようなまとめが半数を超えており，考えの深まりが感じられなかった。つまり，学習内容をふまえて考え，意見をつくりあげ，表現することができていないのである。なお，定期テストでも，資料を活用し，考えを書く問題での無回答の生徒が多い。

背景には大きく３つある。１つは，基礎学力の問題がある。本校の実態として基礎・基本の定着が困難な生徒が多い。これまで授業後に小テストやドリル（ワーク）を用いてくり返し学習を進めてきた。しかし，意欲的に取り組む生徒は少なく，単純な一問一答のような理解に留まり，基礎学力の定着としても効果があまり感じられなかった。

２つ目は，「リフレクション」の一貫として，考えたこと，わかったことをまとめさせていたが，学びを深めるような問いの設定やワークシートなどを用いた学習内容を振り返る工夫ができていないことにある。

３つめは，授業者が単元を通して「何ができるようになるのか」，「何を学ぶか」，「どのように学ぶか」を十分に見通していなかったことがある。つまり，１つの授業で学んだことが次の授業で学ぶ内容につながらなかったのである。

そこで，学んだ社会的事象を相互に結びつけながら多面的に考え，資料などを活用しながら，根拠をもって自分の考えを表現できる生徒を育てるために授業改善に取り組んだ。

２，研究仮説

【仮説１】

①「逆向き設計論」に基づく単元計画を立て，「パフォーマンス課題」を設定することで，生徒が知識，技能を活用する場面が増え，学んだことを相互に関連付けた理解が深まるだろう。

※「逆向き設計論」（資料編 P.13）…通常，教科書の順番通りに授業を進めた上で，評価方法を考えがちであったものを，学習によって最終的に何を身につけてほしいかという生徒の姿を明確にし，そこからさかのぼって，単元を貫く問いを考え，評価方法をあらかじめ決定し，学習内容を設計する方法。

【仮説２】

②単元の中に「リフレクション」を位置づければ，生徒が社会的事象を多面的，多角的に考察し，思考を深めることができるだろう。

※「リフレクション」（資料編 P.14）…自分の積んだ経験を「振り返る」こと。経験を意味づけ自分の在り方を考えることで同じような状況に直面した時によりよく対処する知や術を見出す活動のこと。今回は，学習内容の振り返り，学習方法の振り返り，学習者の取り組みや理解度の振り返りなどの総称として使っている。これらの活動の中で主体的な学びに向かう意欲や思考力・判断力，表現力の育成，知識・技能の定着につながると言われている。

３，研究内容

①「パフォーマンス課題」の提示と毎授業での意識づけ

逆向き設計論に基づき，単元計画を作成した上で「思考し，表現する力を高めるプログラム」（「見出す」，「調べる」，「深める」，「まとめあげる」）の「見出す」の場面で，以下のような「パフォーマンス課題」を提示する。

※パフォーマンス課題（資料編 P.13，14）とは，従来型の単に知識や技能に○・×をつけるテストではなく，現実に即した形で知識や技能の活用を求める課題のこと

パフォーマンス課題の条件

（１）立場や役割など視点が決まっている。

（２）課題を進める中で育みたい生徒の力を伸ばす場面が設定されている。
※今回の場合は，「考えを深める」ために，資料の読み取りや学習内容を結びつけることが必要な問いになっている。

（３）単元の学習内容の中核を問う課題になっている。
※一問一答ではなく，単元で学習した内容を貫く問いになっている。

（４）実生活や社会での問題の理解や解決に寄与するなど課題自体に目的がある。

学習内容	中核（単元の重点）	パフォーマンス課題	生徒の姿
世界から見た日本の姿	日本には人口，産業，資源，エネルギーなどさまざまな問題があり，持続可能な社会を構築していく必要がある。	「あなたは日本の総理大臣です。日本の問題を取りあげて説明せよ。また，将来みなさんの子どもや孫が希望をもって生きていける社会にするには，どうしたらよいと思いますか。解決策を考え，国民に向けて演説できるようにレポートにまとめましょう。」	社会の問題に対して考えを深める
九州地方	自然環境を中核とした考察 自然環境を生かした農業や観光などを進める一方で，噴火や洪水，土壌の流出などの自然災害や公害問題の解決に取り組んでいる。	「あなたは旅行会社のツアーコンダクター（旅行を企画し，運営する人）です。エコツーリズム（エコツアー）の企画者として，1泊2日の旅行の企画書をつくり，お客さんに提案します。行き先を書いた上で，ツアーの内容（①なぜそこなのか，②どんなことを体験，学べるのか，③自分の思いや考え，お客さんへの一言）を書きましょう。」	
中国・四国地方	人口を中核とした考察 過密化する都市や過疎化する農村で見られる問題の解決には，地域の魅力や人材を生かした事業や再開発が求められる。	「あなたは，（　　）県の（過密・過疎）化対策会議のメンバーに選ばれました。（過密・過疎）を解決するためにどのようなことができるかアイデアを書きましょう。」	

単元計画（略案）

例　「九州地方」（全６時間）

プログラム	内容
見出す （１時間）	「九州地方をながめて」 「火山活動に由来する地形・温暖で多雨の気候」 **◎パフォーマンス課題を提示する** 九州地方の自然環境の特色を資料から読み取る場面
調べる （2.5 時間） 九州地方の自然環境のもたらすメリットとデメリットを考える場面	「気候と地形に応じた農業・転換を求められた鉱工業」 「豪雨がもたらす土砂くずれと水害・豪雨と開発がもたらす赤土被害」 「鉄鋼都市から環境都市へ環境と開発の両立」 **◎パフォーマンス課題につながるキーワードにチェックを入れさせる**
深める （1.5 時間）	「九州地方のリフレクション」 （１）振り返りテストを実施する（教科書，ノート使用） （２）グループで九州地方の魅力と問題を整理させる（KJ 法） **◎レポートの作成をさせる（パフォーマンス課題＝「エコツアーをつくろう」）**
まとめあげる （１時間）	発表会 （３）ワークショップ型発表会と小グループでのリフレクション （４）個人でのリフレクション（ルーブリックも活用）

「調べる」場面では，教科書の資料に加え，資料集や図書資料，映像資料を準備し，授業の中で活用し，グループ学習も行った。また，１時間の授業の終わりのまとめを書く際に，「今日学んだことの中でパフォーマンス課題の題材や具体例になりそうなものをノートや教科書にチェックを入れておこう。」と指示をした。

②さまざまな「リフレクション」の実施

（１）単元の振り返りテスト

４時間目（九州地方）の授業の後半では，単元の振り返りテストを行った。「ノートや教科書，資料集を大いに使って問題を解くこと」と指示を出し，生徒が自分でまとめたことや教科書の資料を活用して問題を解かせた。

（２）付箋を活用した問題点の整理

５時間目（九州地方）の授業では，付箋を活用した小グループでの問題点を整理させた。

（３）「ワークショップ型発表会」と小グループでの振り返り

３回以上の発表，３つ以上の発表を聞き，意見や質問を交換させた。また，発表内容，発表の仕方を小グループで振り返りをさせた。

（４）ルーブリック（評価基準）での自己評価

自分のレポートや発表がルーブリックと照らし合わせてどうかをグループで振り返りを行わせた。

評価のルーブリック

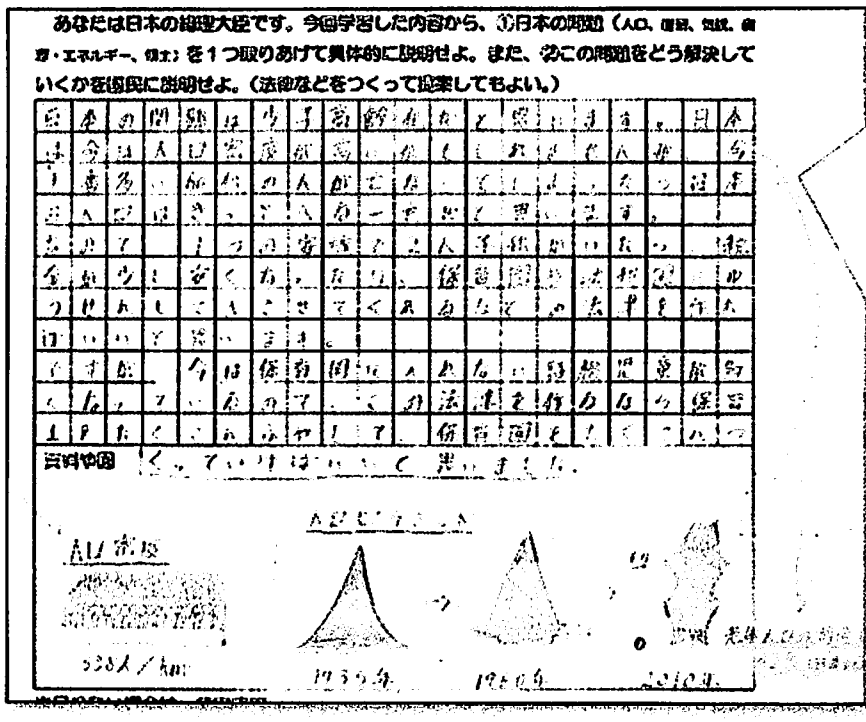
５（大変よくできました。）	３，４の点を達成しており， ・学んだことをふまえて，２つ以上の視点で述べている。 ・資料をもとに理由を示し，具体的に述べている。 ・オリジナリティ（独創性）や工夫がある。
４（よくできました。）	・学んだことを他のことと結びつけて自分の思いや考えを書いている。
３（合格）	・学んだことを生かして書いている。
２（もう少し頑張ろう）	・学んだことと関わりがないことが書かれている。
１（まだまだです）	・文章として成立していない。書いていない。

4，結論

―検証―

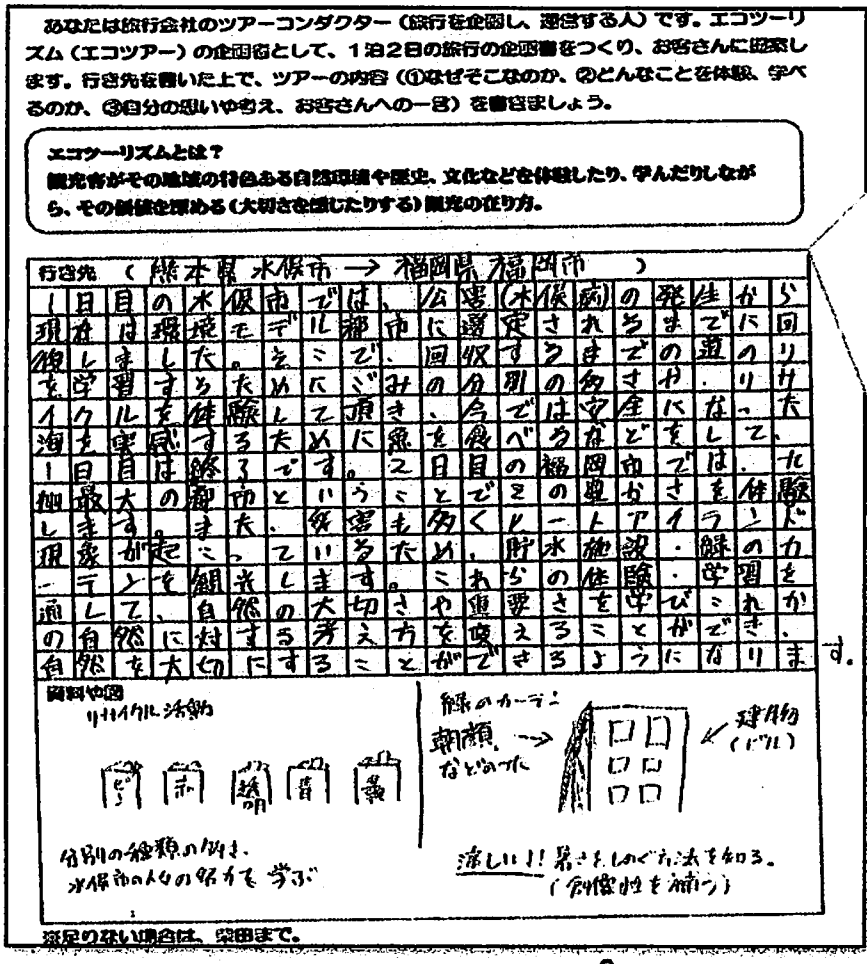
【仮説１】①の実践と検証

生徒の作品１　「世界から見た日本の姿」



日本の問題は少子高齢化だと思います。日本は，今は人口密度が高いかもしれませんが，今一番多い60代の人が亡くなってしまったら，日本の人口は減る一方だと思います。なので，１つの家族で２人子どもがいたら，税金が少し安くなったり，保育園や幼稚園に優先して入れさせてくれるなどの法律を作ればいいと思います。ですが，今は保育園に入れない待機児童が多くなっているので，この法律を作るなら，保育士を増やして，保育園をたくさんつくっていけばいいと思いました。

生徒の作品２「九州地方」



１日目の水俣市では，水俣病の発生から現在は環境モデル都市に選定されるまでに回復しました。そこで，回復するまでの道のりを学習するためにごみの分別の多さやリサイクルを体験して頂き，今では安全になった海を実感するために魚を食べるなどをして１日目は終了です。２日目の福岡市では，九州最大の都市ということで豊かさを体験します，また，災害も多く，ヒートアイランド現象も起こっているため，貯水施設・緑のカーテンを観光します。これらの体験・学習を通して自然の大切さや重要さを学びこれからの自然に対する考え方を変えることができ，自然を大切にできるようになります。

パフォーマンス課題をあらかじめ提示し，毎授業の終わりで意識させることで生徒が学習内容を結びつけながら，比較的短い時間でレポートを書くことができた。

生徒の作品１をみてわかるように，適切な資料を選び，人口ピラミッドの変化から読み取ったことから考えたことを生かした記述ができている。また，生徒の作品２をみてわかるように，「水俣病」から「環境モデル都市」への移り変わりなど学んだことを結びつけて記述ができている。

◎アンケートより

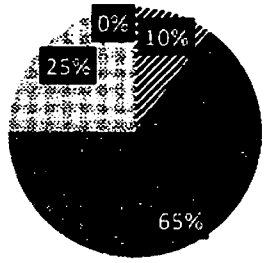
Q　根拠を持って意見を考えたり，説明したりできるようになりましたか？

「大変そう思う」　▨…10%

「そう思う」　■…65%

「あまりそう思わない」▢…25%

「全く思わない」　≡…0%

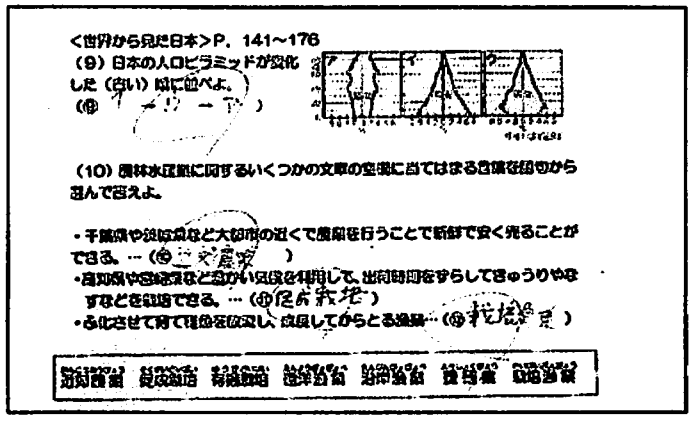


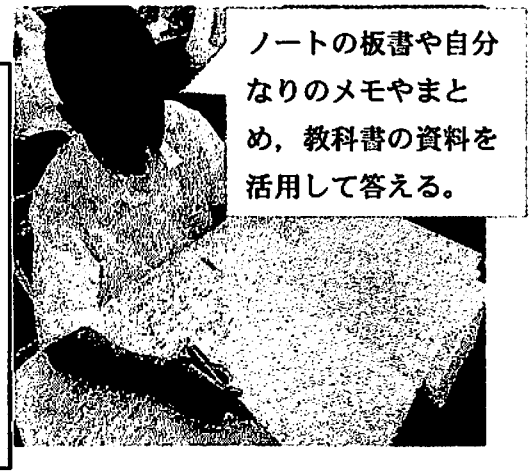
【仮説２】②の実践と検証

（１）単元の振り返りテスト

本校は，基礎・基本の定着が厳しい生徒も多いことから，ノートや教科書を使い，振り返りテストを行い，知識や技能の定着を図った。このことにより，教科書の資料やノートでまとめたことを普段の学習でも使う機会が増えた。

問題例





◎アンケートより

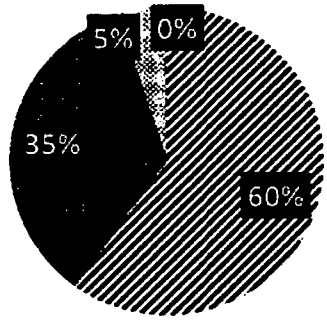
Q教科書の資料やノートでまとめたことを使う習慣がつきましたか？

「大変そう思う」　▨…60%

「そう思う」　■…35%

「あまりそう思わない」▢…5%

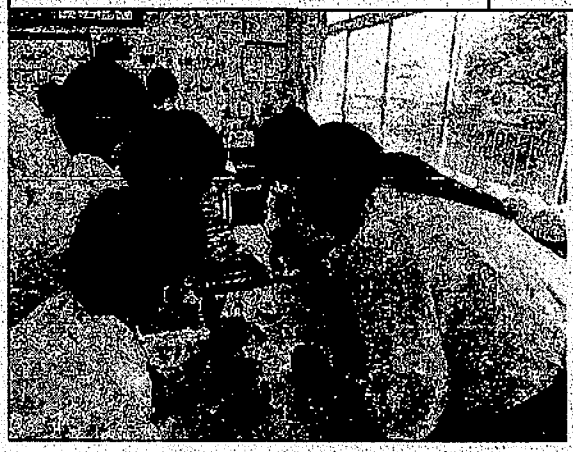
「全く思わない」　≡…0%



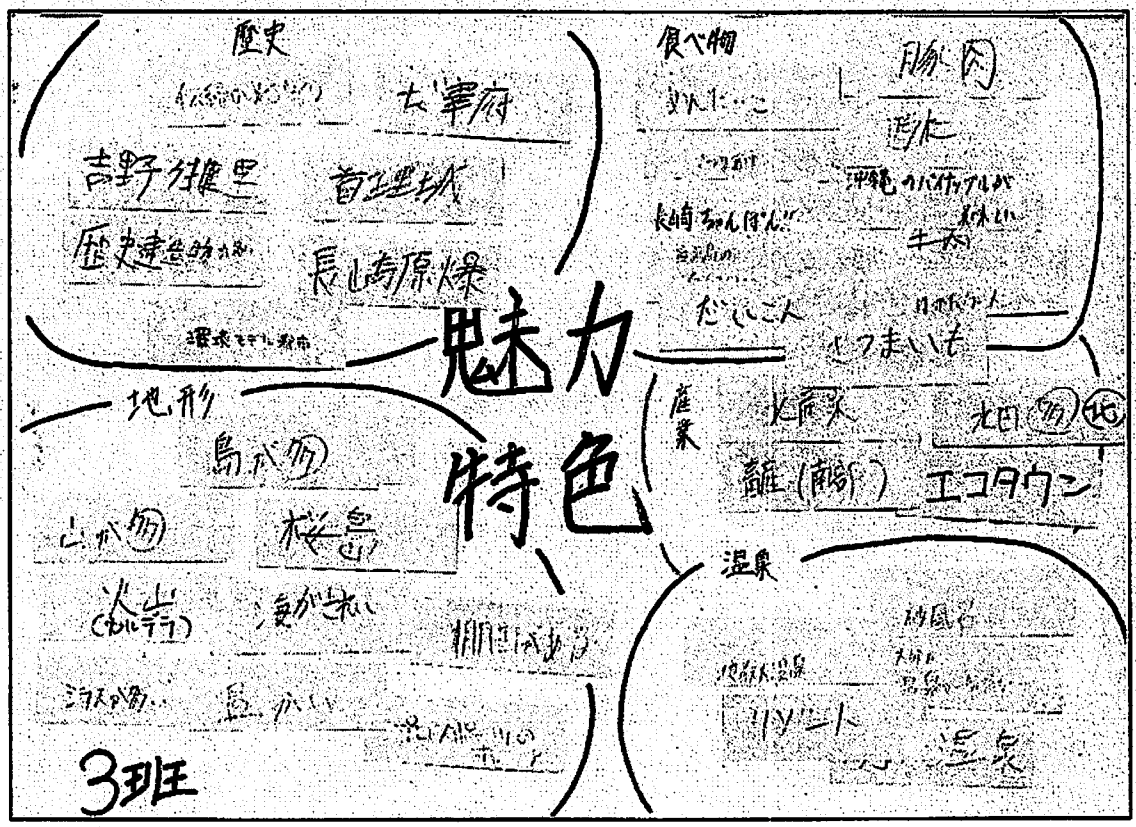
（2）付箋や思考ツールを活用した問題点の整理

「九州地方（例）」

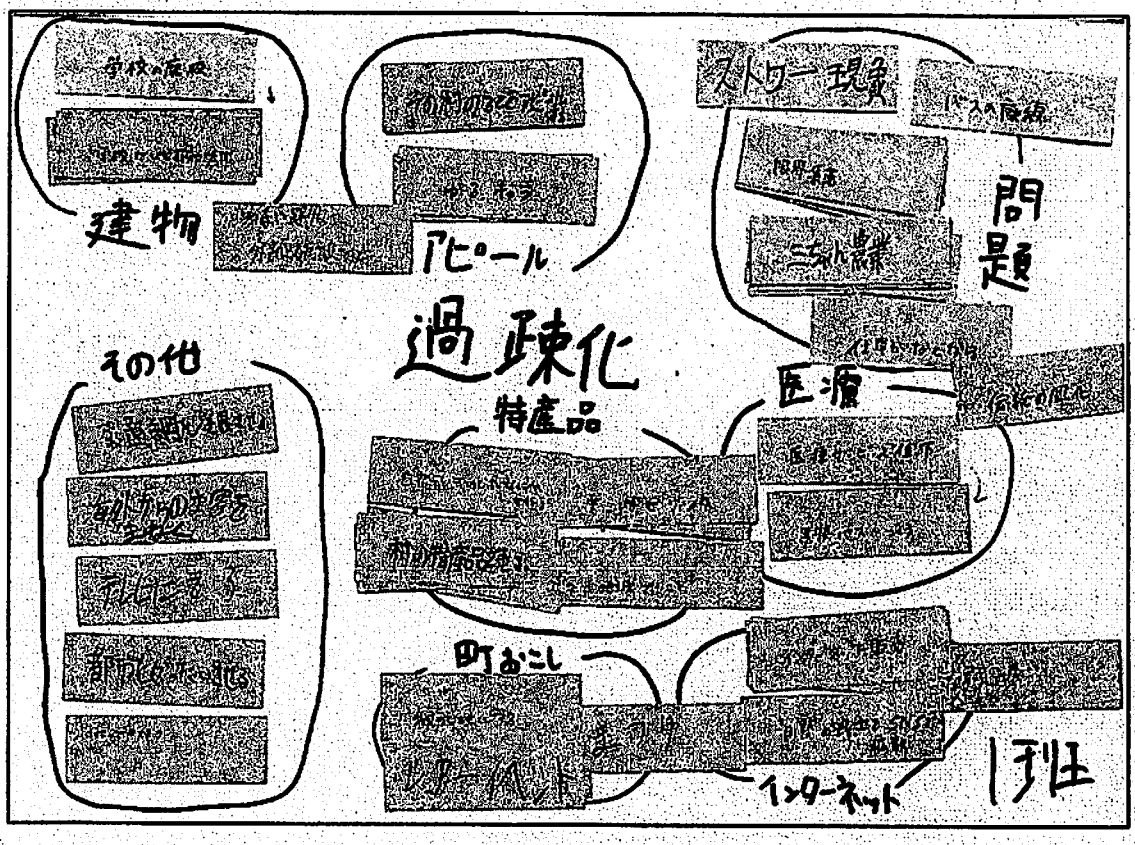
指導内容	ねらい	学習活動
「九州地方の魅力について思いつくことを付箋にできるだけたくさん書きましょう。」	これまでの学習を振り返り，九州地方の魅力を思い出す。	付箋に魅力に関わる問題をできるだけ書く。（個人）
「出した付箋をグループ分けしてみましょう。」	九州地方の魅力を分類し，整理する。	KJ法を活用して，似たものと違うものを分ける。（小グループ）



「九州地方」



「中国・四国地方」



問題点を小グループで整理をすることで，社会的事象の関係性を整理することができた。レポートが苦手な生徒もここで出たキーワードをもとにレポートを書くことができた。

（3）ワークショップ型発表会と振り返りの記入（資料編P．14～16）

３回以上の発表，質疑応答をくり返し行った。そのことにより，自分の考えの不十分な視点について振り返り，他の生徒の意見を取り入れ再構築することで，考えを深めることができた。また，「自分も実際に取り組んでみたい。」や「次回はこうしてみたい。」と次の学習や生活に生かす意欲を示す生徒も多かった。「○○州についてわかった。」というような単なるまとめや感想が減り，発表を聞く中で生じた考えを書く生徒が多くなった。また，単元の振り返りの記述量では，０～１行が減り，３行以上が増加した。

記述量	昨年度 （世界のさまざまな地域）	今年度 （世界から見た日本の姿）
０～１行	48%	0%
１～２行	28%	18%
３行以上	24%	82%

◎記述式アンケートより

Q　ワークショップ型の発表はどうでしたか。

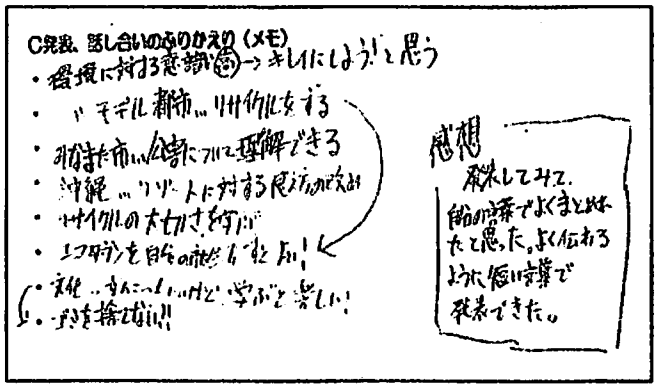
「ワークショップ型発表をすることで緊張せずに発表できた。」

「普段あんまり発表しない人の意見が聞けた。」

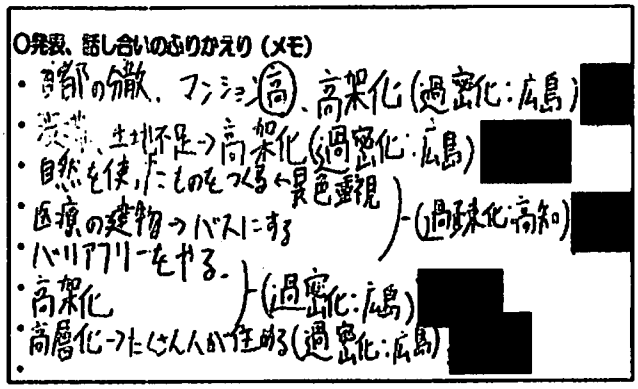
「質問が多くなった。意見を言うこともできた。」

「班の人と協力して自分が知らなかったことを知ることができた。」

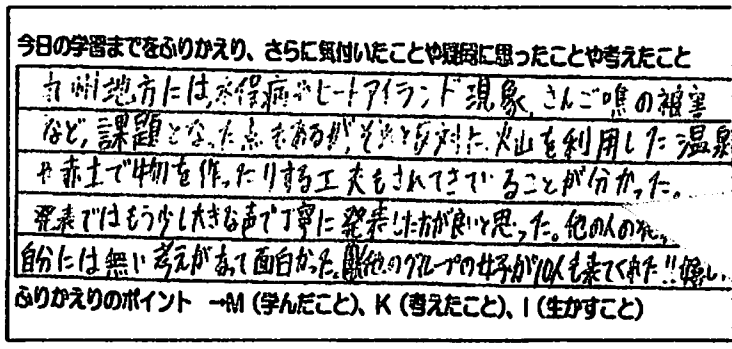
発表のメモ（例）九州地方



中国・四国地方

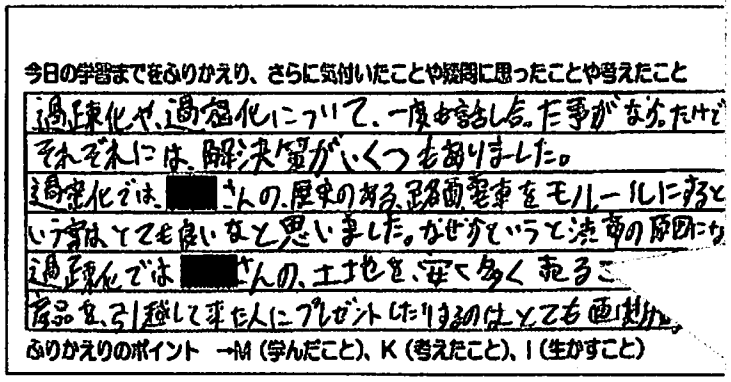


「九州地方」生徒の振り返り



九州地方には水俣病やヒートアイランド現象，さんご礁の被害など課題となった点があるが，それと反対に火山を利用した温泉や赤土で物をつくったりする工夫もされていることがわかった。発表ではもう少し大きな声で丁寧に発表した方が良いと思った。他の人の発表では自分には無い考えがあって面白かった。

「中国・四国地方」の生徒の振り返り



過疎化や過密化について一度も話し合ったことがなかったけど，それぞれには解決策がいくつもありました。過密化では，○○さんの歴史ある路面電車をモノレールにするという案は，とても良いなと思いました。なぜかというと（路面電車は）渋滞の原因になるからです。過疎化では，○○さんの土地を安く売る案がよかったです。特産品を引っ越しした人にプレゼントしたりするのはとても画期的だなと思いました。

（4）ルーブリック（評価基準）での自己評価

自分のレポートや発表がルーブリックと照らし合わせてどうかをグループで振り返りを行うことで，次のレポートの改善点を見つける生徒や他の生徒のレポートをルーブリックに基づいて良い点を見つけることができる生徒が増えた。

生徒の振り返りより抜粋

「〇〇さんの発表は，２つ以上の視点から書けていてすごいと思いました。」

「〇〇さんの対策がとてもすごいと思いました。私の対策はうまくまとまらなかったのが反省点です。」

「〇〇さんのように資料をもう少し分かりやすく説明できるように頑張りたい。」

「過疎化の対策として，エコツーリズムなどを考えましたが，発表した後の質問に上手く答えることができませんでした。次からは発表では，質問した相手も納得するような文を書きたいです。」

「ルーブリックに照らして，自分の意見をもう少し書いてもよかった。」

―成果―

①パフォーマンス課題に取り組むことで，学習内容を結びつけた記述が増え，資料に基づいて意見を考えたり，説明したりする力を高めることができた。

②さまざまなリフレクションに取り組むことで，多様な意見を取り入れ，自身の考えを振り返る中で考えを深めることができた。

その他

・リフレクションをくり返すことで，振り返りにかかる時間が短縮され，記述量も増えた。

・ワークショップ型発表やパフォーマンス課題に取り組ませることで，ペーパーテスト以外の評価の充実が図れた。

―課題―

①パフォーマンス課題（レポート）の内容に関しても，添削や指導が必要である。

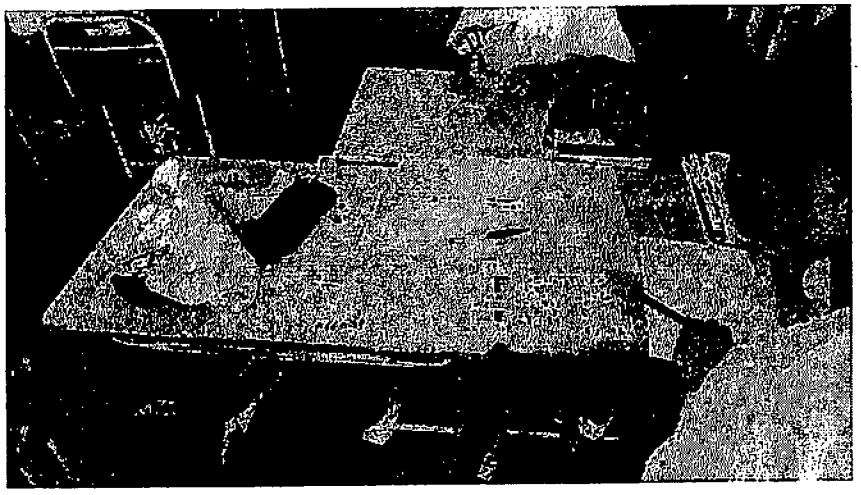
②リフレクションの時間の確保に工夫が必要である。

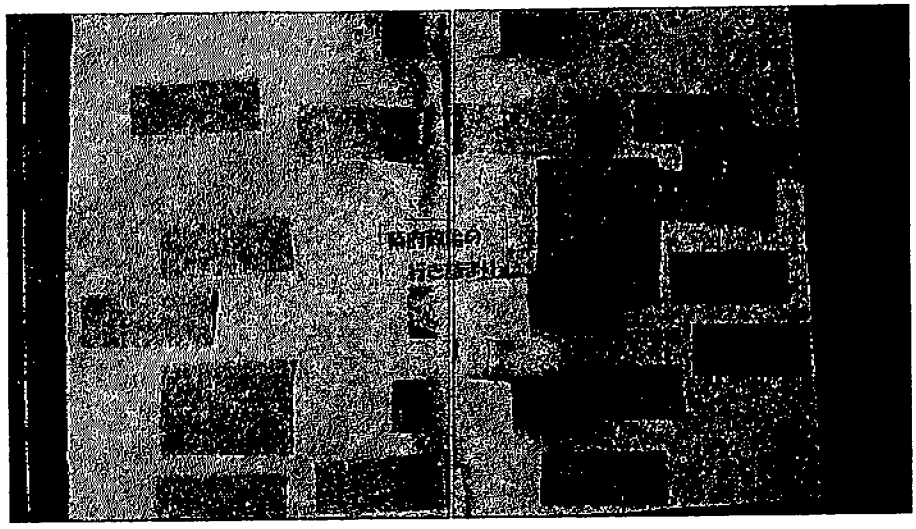
その他

・公民的分野などの学習がさらに進んだ時に，「過疎化」，「少子高齢化」など同じテーマでレポートを書かせたものを比較することで考えの深まりや変容がより明確に見ることができる。

第68次印旛地区教育研修会
（社会科教育・中学校）

社会的な見方・考え方を働かせる授業の在り方
～思考ツールを使った単元のまとめ～





佐倉市立臼井西中学校
田中　一成

１．研究主題

社会的な見方・考え方を働かせる授業の在り方 ～思考ツールを使った単元のまとめ～

２．主題設定の理由

（１）新学習指導要領から

平成３２年度より全面実施、今年度より移行期間に入った新学習指導要領について、今回の改定は、平成２８年度１２月の中央教育審議会答申を踏まえたものである。

① ＜学習指導要領（平成 29 年告示）―社会編―第１章 総説より＞

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善を進めることとし、留意して取り組む事項として、以下の点を挙げている。

エ．１回１回の授業ですべての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。

オ．深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になる・・・
各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる。

② ＜学習指導要領（平成 29 年告示）―社会編―第２章 １ 社会科の目標より＞

社会的な見方・考え方については、以下のように述べられている。

「社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法（考え方）」である」

社会的な見方・考え方を働かせるとは、そうした「視点や方法（考え方）」を用いて課題を追究したり解決したりする学び方を表すとともに、これを用いることにより児童生徒の「社会的な見方・考え方」が鍛えられていくことを併せて表現している。」

社会的な見方・考え方働かせることは、・・・本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力、判断力の育成はもとより、生きて働く知識の習得に不可欠であること、主体的に学習に取り組む態度にも作用することなどを踏まえると、資質・能力全体に関わるものであると考えられる」

③ ＜学習指導要領（平成 29 年告示）―社会編―第２章 ２ 歴史的分野の目標より＞

歴史的な見方・考え方について、

ア． 時期、年代など時系列に関わる視点

イ． 展開、変化、継続など諸事象の推移に関わる視点

ウ．　類似、差異、特色など諸事象の比較に関わる視点
エ．　背景、原因、結果、影響など事象相互のつながりに関わる視点
などに着目して捉え、比較したり、関連させたりして社会的事象を捉えたりすること」としている。

こららのことを踏まえ、中単元のまとめの授業で意図的に「歴史的な見方・考え方」の働きを組み込んだ授業を行うことで、本質的な学びを促し、「思考力、判断力、表現力」を備え、主体的に学習に取り組む生徒を育てたいと考え、本研究主題を設定するものである。

（2）印教研研究主題から

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習 ～自ら課題を見出し、自らの考えを表現できる児童生徒の育成をめざして～

これは、現行の学習指導要領の小中学校社会科の共通の目標である「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」を受けて立てられている。新学習指導要領に「グローバル化」「主体的」という文言が新たに加えられたが、社会科の本来的な使命は変わらないと考える。

社会科研究部のこれからの方向性として、「学んだことを実生活や実社会において、どのように生かすことができるのか、自分にも関われることがあるのではないかと考え続けることができる児童生徒の育成」を目指すことが示されている。これは、新学習指導要領に示されている育成すべき資質・能力の一つである「知識及び技能」が不可欠である。それは「社会的な見方・考え方」を働かせた授業によって育まれるものである。本研究においても、歴史的な見方・考え方を働かせる授業を通して、資質の育成を図る効果的な社会科指導のあり方を探るものである。

（3）本校生徒の実態から

本校は佐倉市臼井駅周辺から臼井城址公園、印旛沼を望む地域を学区に持つ地域で、素朴な生徒が多い。学習に対しては、落ち着いた雰囲気で教師の指示に取り組もうとする素直さがある。一方で、家庭学習の習慣のない生徒が多い。

H29 年度に実施された全国学力状況調査では、全国平均をやや下回り、とくにB問題（応用）の正答率が低い。佐倉市学習状況調査（国語、数学、理科、英語）においては、2 年生（29 年度の 1 年生）は、英語を除く 3 教科で市内平均を下回っており、学習内容の理解に困難さを示す生徒も多い。

〔アンケート①〕

○ 授業で予想をたてたり、まとめたりするのは得意ですか？（108 人実施）

（得意）	14 人	（ある程度できる）	25 人
（あまりできない）	49 人	（苦手）	20 人

〔アンケート②〕

○ どのような学習活動が好きですか？＜複数回答可＞（108 人実施）

（調べる）	52 人	（ノートをつくる）	54 人
（説明・話を聞く）	79 人	（問題を解く）	41 人
（考えを書く（記述））	24 人	（話し合う・グループ活動）	59 人
（考えを発表する）	13 人		

〔アンケート③〕

○ グループで協力した方が、予想したりまとめたりしやすいと思いますか。

（しやすい）	85 人	（しにくい）	23 人

半数以上の生徒が「予想をたてたり、まとめたりする」活動に苦手意識を持っていることがわかる。授業には男女とも前向きに取り組む生徒が多く、「ノートをつくる」「説明・話を聞く」など、受け身の活動を好む傾向が強いことがわかる。グループ活動は、好む生徒が多く、活動に積極的に参加する。

本研究ではこのような実態を踏まえ、単元のまとめの授業では、小グループの活動を取り入れ、また、思考ツールを用いて「歴史的な見方・考え方」を可視化することで、生徒の理解を深めたい。

３．研究目標

中単元の終わりに「歴史的な見方・考え方を働かせた　まとめの授業」を行うことで、生徒の理解がより深まり、表現する力が高まることを明らかにする。

４．研究仮説と研究方法

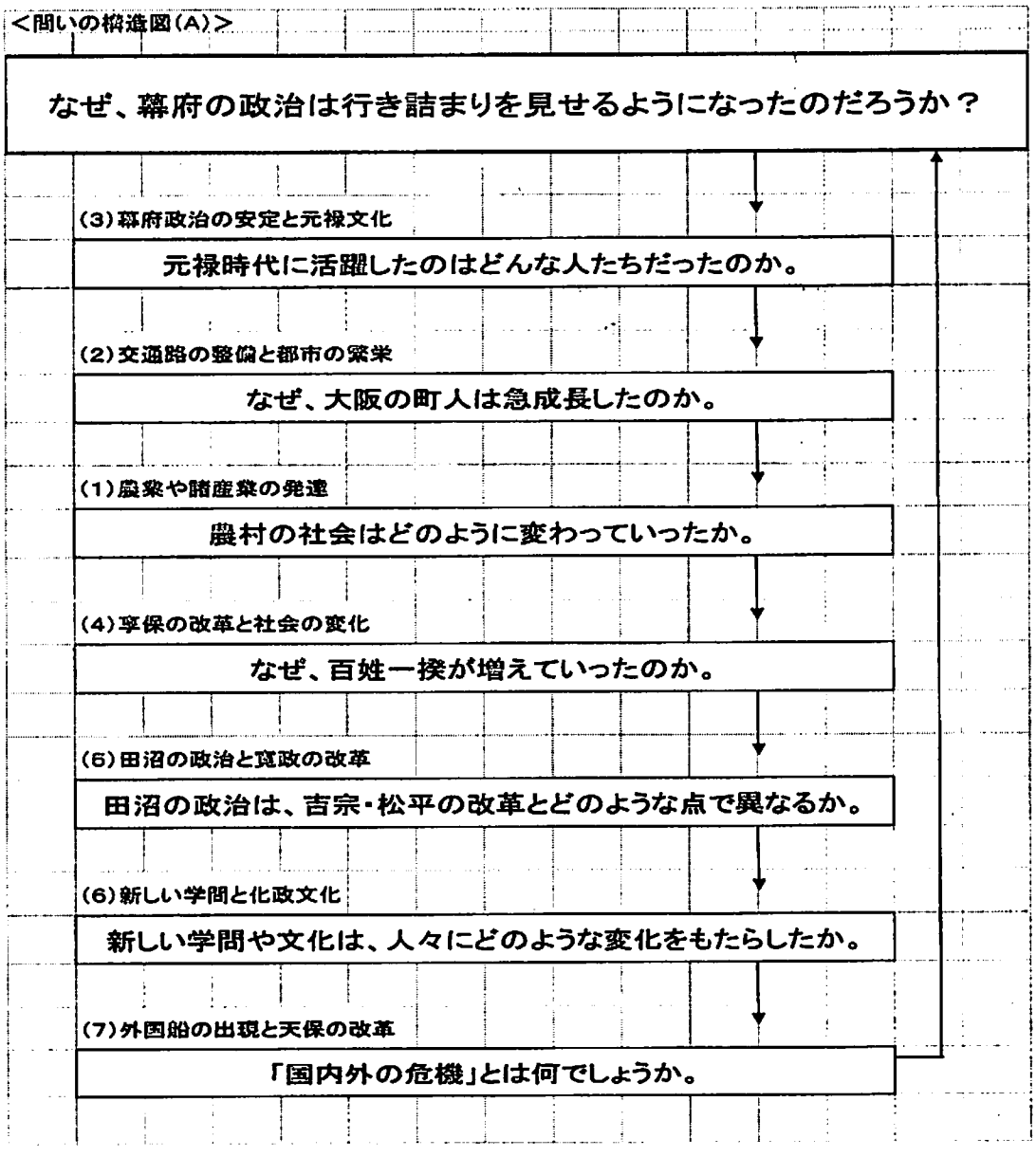
＜仮説１＞

「問いの構造図」を示すことで、その（中）単元や１時間単位の授業で「何を学ぶのか」という見通しを持つことができ、また、相互の関連性を意識することで、まとめの授業の理解がより深まるであろう。

（手立て１）

「問いの構造図」を示すことで、その（中）単元や１時間単位の授業で「何を学ぶのか」という見通しを持つことができ、また、１時間１時間の授業の関連性が意識され、まとめの授業の理解がより深まるであろう。

「これから授業がどのように進んでいくのか」をわからないままに、また、１回１回の授業のつながりが意識できないまま授業が進むと、生徒たちは方向性を失い、受け身で授業を受けることになる。見通しを持たせることで、授業ごとの関連性が生まれ、生徒が主体的に課題解決に向かうものと考える。



（方法 2）

1時間単位の授業で、キーワード・キーフレーズを出させて、それが（中）単元の課題（問い）を追究する上で重要なことを示唆する。

ここで挙げたキーワード・キーフレーズをカードにし、まとめの授業で使用する。1時間1時間の授業のカード化されたキーワード・キーフレーズが、まとめの授業でつながりを持つことで、相互の関連性がより意識され、「歴史的な見方・考え方」が鍛えられるものと考える。

＜仮説 2＞

「歴史的な見方・考え方」を可視化した授業を行うことで、社会の変化などの推移、歴史的事象の原因や結果など事象相互の関連やつながりについての理解が深まるだろう。

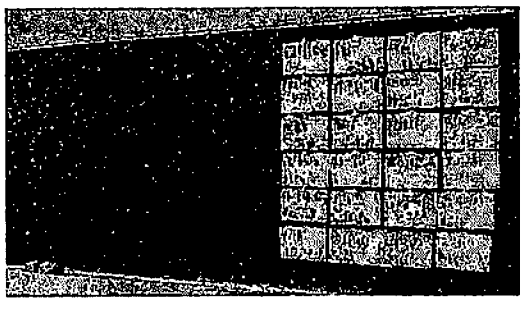
（手立て 1）

思考ツール（マッピングとステップチャートの混合）と付箋を用い、知識や情報を可視化する。

（手立て 2）

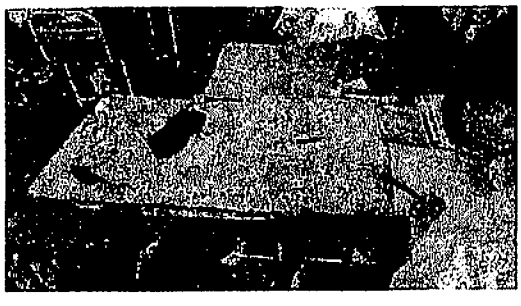
小グループで意見交換をさせる。

(1)



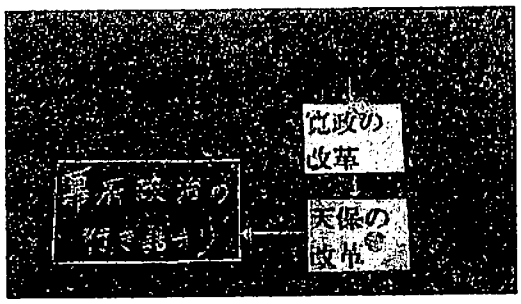
ここまで学習したキーワードやキーフレーズを黒板に並べ、既習事項を簡単に振り返る。

(2)



3～4人グループを使い班活動とする。黒板に張り出されたキーワードのグループ分けを行う。話し合い、試行錯誤しながら張り替えられるように、付箋を使用する。

(3)

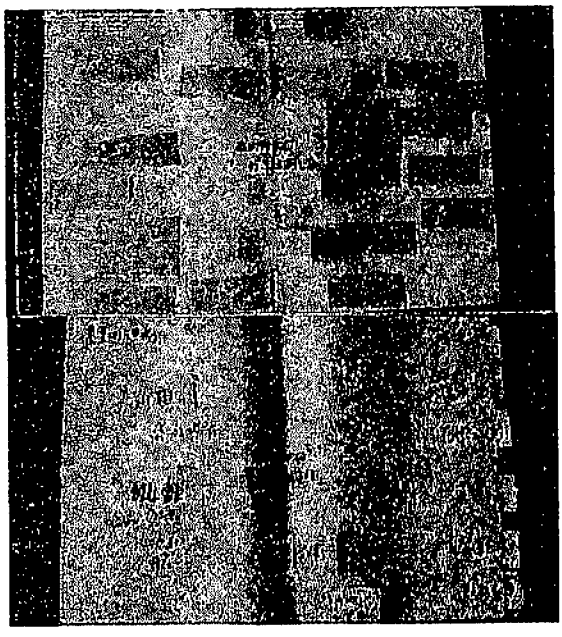


カードを矢印でつないでいく。時代の新しいものから古いものへと遡ってつくっていく。⇒ 「なぜ」「なぜ」と問い続けていく。

(4)

ノートを見ながら振り返り、また班員と意見交換しながら進めていく。

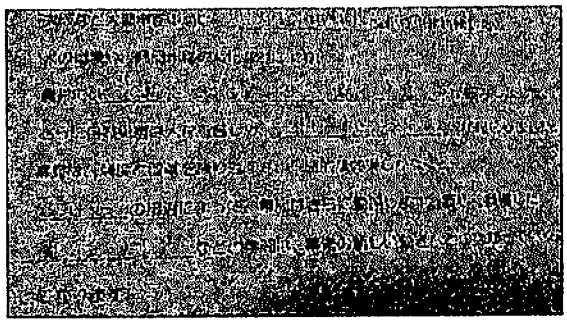
(5)



試行錯誤し、知識を整理、相互に関連づけ、また意義・原因と結果・推移等を把握することが目的なので、矢印が交差したり、班によって付箋を貼る位置が違っていたりしてもかまわない。

(6)（時間がかかってしまったので）代表１班に発表してもらった。

(7)



まとめを書き、ノートに貼る。長い記述は苦手とする生徒が多いので、空欄補充型とした。

「稲の」
稲田
米の稲
刈り
作物。
作物。
心
植物。

大阪など大都市を中心に＿＿＿＿＿＿文化が生まれました。

米の増産や、商品作物の栽培などにより、

農村では＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿が拡大しました。

さらに自然災害は人々を苦しめ、＿＿＿＿＿＿＿＿が起こりました。

幕府は、幾度と改革を繰り返すも、一時的な効果しかなく、

＿＿＿＿の接近によって、幕府はさらに動揺します。新しく登場した、

＿＿＿＿＿＿＿などの学問は、幕末の新しい動きへとつながっていくことになります。

5. 仮説の検証

＜仮説 1＞

「問いの構造図」を示すことで、その（中）単元や１時間単位の授業で「何を学ぶのか」という見通しを持つことができ、また、相互の関連性を意識することで、まとめの授業の理解がより深まるであろう。

単元のはじめに実施した、問いの構造図について、課題（問い）は示す程度にとどめ、予想させたり、深く追究したりすることはしなかった。しかし、小学校で学習した内容があるものの、これから学習する内容であるため、構造図を示された時点で多くの生徒は、うまく把握できないようだった。

しかし、授業を行う者が、学習内容を構造的に把握しておくことは非常に大事なことだと考える。＜仮説②＞の検証にアンケートに載せているが、まとめの授業で理解が深まったか？という質問に対し、「思う」「どちらかというと思う」がほとんどであった。思考ツールで可視化したこともあろうが、単元を構造的にデザインし、授業を行ってきた結果でもあるだろう。

新学習指導要領解説―社会編―の「歴史的分野の学習内容と学習の過程の構造図」という大きなものから、1 時間単位の授業まで構造的に捉え直すことで、「どの知識を元に」「何を」「どのように学ぶのか」「どのように課題を追究する」のかが明確になるものである。

＜仮説 2＞

「歴史的な見方・考え方」を可視化した授業を行うことで、社会の変化などの推移、歴史的事象の原因や結果など事象相互の関連やつながりについての理解が深まるだろう。

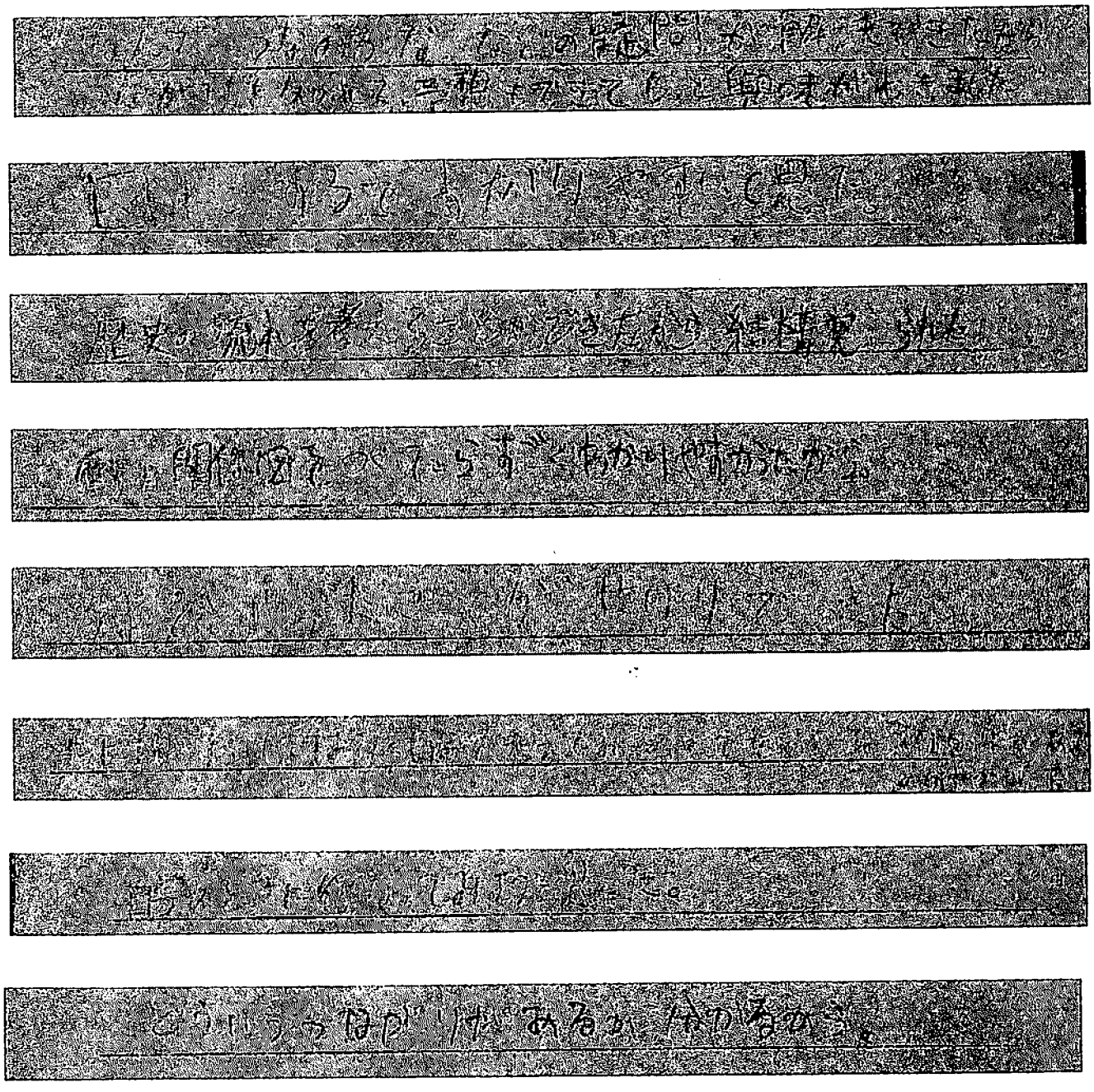
事後アンケートの結果

○ 図を利用したまとめの授業で理解が深まったと思いますか？（103 人実施）

（思う）	52 人	（どちらかというと思う）	44 人
（どちらかというと思わない）	4 人	（思わない）	3 人

○ 今日の学習では、意欲的に自分の意見を言えましたか？（103 人実施）

（意欲的に言えた）	27 人	（言えた）	40 人
（控えめだが言えた）	21 人	（言えなかった）	15 人

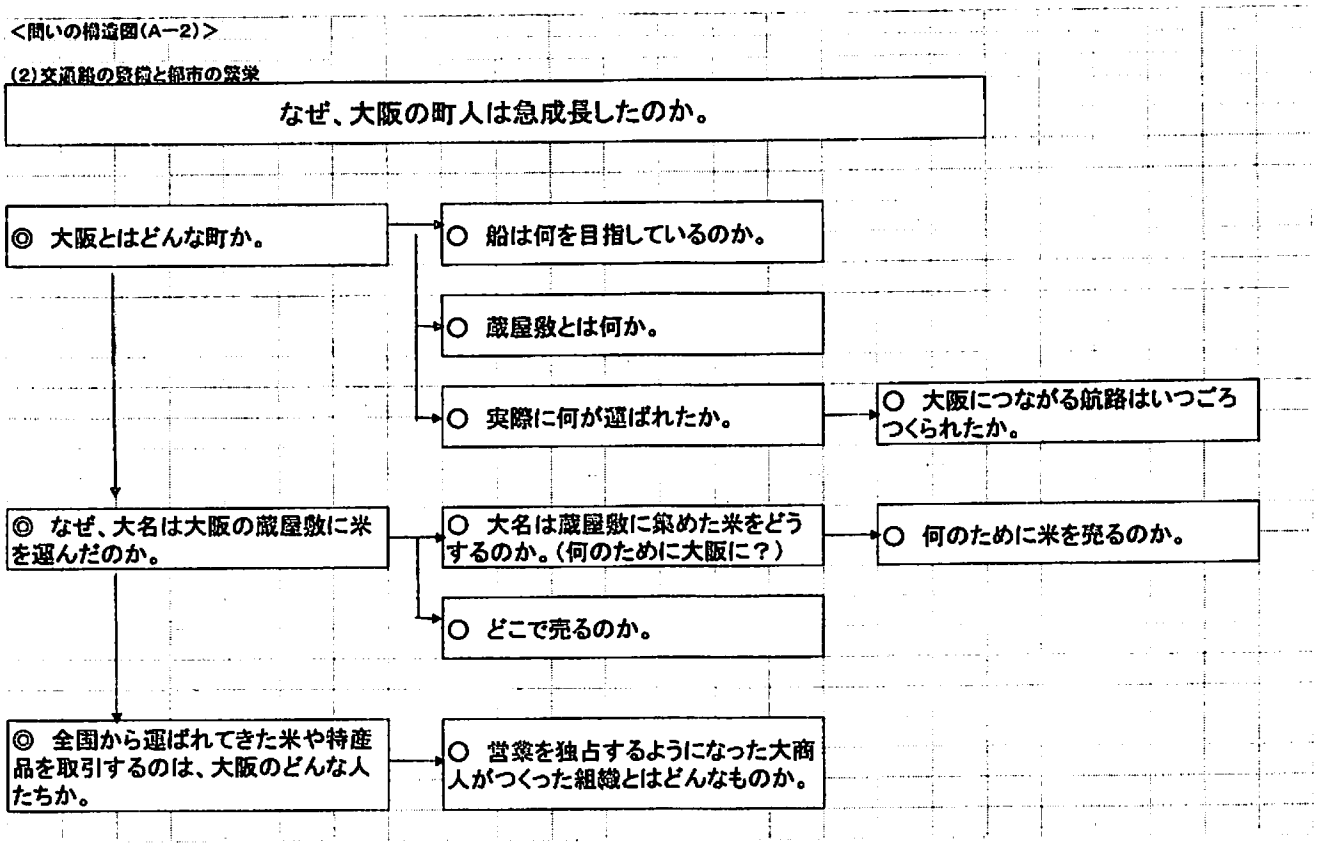


4クラスでこの授業を実施したが、1クラス目は、紙に何もない状態から付箋を貼らせたので、発表とまとめにたどり着かなかった。一からつくるのは、生徒にとって難しく「得意な生徒」に頼る結果となった。2クラス目からは、カードのうち、4分の1をヒントとして黒板に貼り、残りを生徒に貼らせた。発表とまとめまで終えたが、すべてのグループに発表してもらうことができなかった。

アンケートの結果から、「理解が深まった」と感じている生徒が、ほとんどであった。「整理できた」「つながりがわかった」「流れを考えることができた」など答える生徒が多く、単に歴史的事項の習得にとどまらず、歴史的事象の意義、関連性、原因と結果、社会

の変化や推移といった『歴史的な見方・考え方』にせまることができたのではないかと思う。

ただし、教師が１時間単位の授業の中の一つひとつの発問から、学習課題、単元のまとまりの課題まで、構造的につなぎ合わせて練っていなければ、形だけを取り入れても理解が深まらないものと思う。１時間単位の「問いの構造図」の例を次ページに載せておく。



生徒の活動について、普段は受け身でいることの多い生徒も、小グループでの活動であったので、積極的に意見を交換していた。また、「既習事項の再整理」であったので、取り組みやすかったと思う。

6．成果と課題

＜成果＞

○「問いの構造図」を示すことで、社会科の授業は、「単に知識を覚えること」ではなく、「課題を追究する」「疑問を解決する」ことが目的であるという意識を持たせることができた。

○「問いの構造図」を作成したことで、（授業者）が、単元の内容を構造的に把握して１時間単位の授業を行うことができた。また、１時間１時間の授業を関連させ、最後のまとめの授業へとつなげることができた。

○ キーワード・キーフレーズを出させることで、１時間１時間の授業、あるいはまとめの授業との関連を意識させることが出来た。

○ まとめの授業を行うことで、「整理できた」「つながりがわかった」「流れを考えることができた」など答える生徒が多く、単に歴史的事項の知識の習得にとどまらず、意義、関連性、原因と結果、社会の変化といった『歴史的見方・考え方』にせまることができた。

○ 話し合い活動で、意見交換をして考えを共有できた。既習事項の再整理なので、意見を出しやすかった。

＜課題＞

● 「まとめの授業」は、いきなりやってもうまくいかない。

⇒ １時間１時間の授業を行き当たりばったりで行い、いきなりまとめの授業をやったとしても、生徒たちは１時間でまとめることはできなかったと思う。

「問いの構造図」で、７時間分の学習課題を、全体の課題につながるようにつくったので、生徒はノートの学習課題「なぜ？」とまとめ「～だから」をみることで、考えられた。

各単元で「問いの構造図」の研究も必要。

● 考えることに時間が掛かる。

⇒・事前に付箋を準備（授業準備が大変）

・1／4 程度の付箋を散りばめて、間を埋めて完成させるように補助。例えば 1→○→○→○→5→○→○→8 と並べて間を考えさせる。

・キーワード・キーフレーズは、網羅的に使用するのではなく、課題の追究に必要最低限のものを使う。

● 授業時数が多くなってしまう。

⇒・内容のまとまりを考えて授業を構成（見開き＝1 時間にこだわらない）。

・（部分的に）ワークシートを活用する。

・必要以上に細かい内容に踏み込まない。

（教科書の内容で、如何に本質を理解させるか）

● 低位の生徒には難しい。

⇒・小グループを活用すべき。

・まとめの授業で使うキーワード・キーフレーズを精選し、中単元の課題を追究するために必要最低限のものに絞ることで、付箋（カード）の枚数を減らし、考えやすくする。

● 様々な思考ツールを研究し、その単元を追究する上で適切なものを選択して使っていく必要がある。

⇒　マトリックス（表）による比較

データチャート（表）による分類

ステップチャートによる推移・時系列

クラゲチャート・イメージマップによる関連付け

自分で使いやすいように、組み合わせ、変形、

または、新たに開発してもよいのではないか。

● 教師が教えるべき内容と、課題を追究するべき内容とを区別し、活動ありきにならないようにしなければならない。

特に、今回の内容は「貨幣経済と社会の変化」という、中学生には非常に難しい内容を含むので、「経済史」については、しっかりと教えるべきである。

● 「まとめの授業」について、今後も研究を継続したい。

第６８次印旛地区教育研究集会
（社会科教育・中学校）

国際社会への興味・関心を高める社会科教育のあり方

～2020年東京オリンピック・パラリンピックを通して～

1　設定理由

・世界規模での社会的事象をもとに，海外の文化や価値観等について調べ学習を用いて多面的・多角的に考察することで，国際社会への興味・感心を持たせ，高めたいと考えた。

・「外国＝危ない」という固定観念が根付いており，外国も関わる社会的事象という点でオリンピック・パラリンピックを題材にし，それについて，正確な情報を調べることが必要であると考えた。

2　研究仮説

・東京オリンピック・パラリンピックについて調べることで，外国に関する興味・関心が高まるであろう。

・世界的に有名かつ身近な社会的事象について，問題解決的な調べ学習を用いて学ぶことで，生徒の関心・意欲が高まり主体的に学習する態度が身につくであろう。

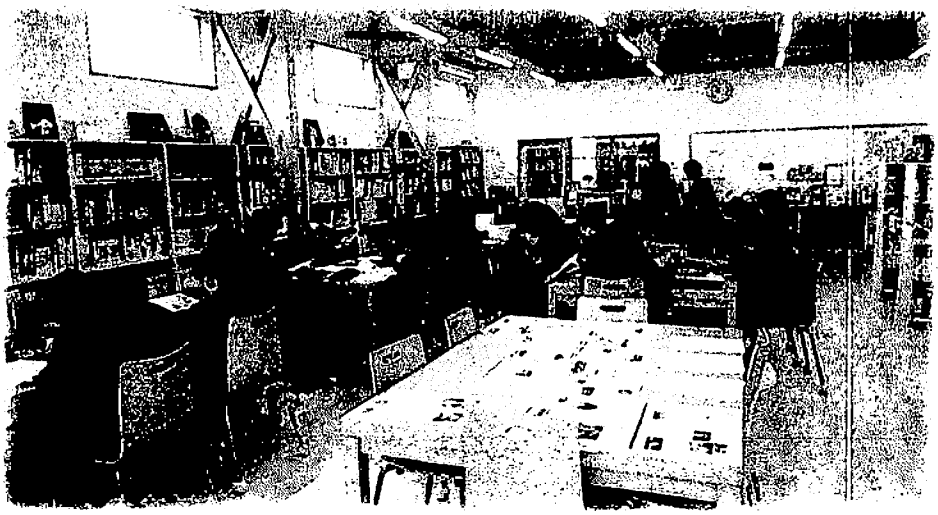
3　研究内容　「オリンピック・パラリンピックについて調べよう」

（1）本校生徒の実態の分析と研究目標　（2）オリンピック・パラリンピックについて調べよう
（3）仮説の検証　（4）成果と課題

4　結論

・オリンピック・パラリンピックについての調べ学習を行うことで，外国への興味・関心が高まると考えたが，国際社会よりも社会的事象そのものへの興味・関心が高まった。

・問題解決的な学習を行うことで，社会科が苦手な生徒や調べ学習などの取り組みが苦手な生徒の関心・意欲が高まり，主体的に学習することができるようになった。



白井市立大山口中学校
湯浅　一磨

1　研究主題

国際社会への興味・関心を高める社会科教育のあり方

～2020年東京オリンピック・パラリンピックを通して～

2　主題設定の理由

（1）学習指導要領から

本研究は「中学校学習指導要領　第２章　第２節　各分野の目標及び内容　地理的分野目標」を受けて設定している。その中の目標では，次のように述べられている。

> 社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ，課題を追求したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

また，「公民的分野　２内容　D私たちと国際社会の諸課題（１）世界平和と人類の福祉の増大，アの（ア）」では，「世界平和の実現と人類の福祉の増大のためには，国際協調の観点から，国家間の相互の主権の尊重と協力，各国民の相互理解と協力及び国際連合をはじめとする国際機構などの役割が大切であることを理解すること。（後略）」とされている。これらのことをふまえ，オリンピック・パラリンピックという，世界規模での社会的事象を通して，異文化を理解し，尊重することは非常に重要である。その先駆けとして，まずは国際社会への興味・関心を高めることが大切だと考えた。

（2）印教研研究主題から

> よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習
> ～自ら課題をみいだし，自らの考えを表現できる児童生徒の育成をめざして～

印教研研究主題の副題にある「自ら課題をみいだし，自らの考えを表現できる」とは，現在の社会状況について知り，その上で自分たちにできることを考え，行動に移していくことだと理解できる。これを受け，本研究では２年後に迫る東京オリンピック・パラリンピックについて学ぶことで，ホスト国の国民として，とるべき態度等について考えることが，「生きる力」を養うことに繋がると考える。

（3）本校生徒の実態から

平成29年度の標準学力テストの結果（表１）を見ると，関心・意欲の観点では県平均の値を上回っていることがわかる。そこで本校では，この高い関心・意欲を更に高めるとともに，この関心を様々な社会的事象において活かせる指導法のあり方について研究を重ねてきた。

生徒の実態を把握するため，アンケートを実施（資料１）したところ，社会科での好きな学習方法は，「説明を聞く」や「調べ学習」であることがわかった。また，海外に関するアンケート（表２）で

は，海外旅行に行ってみたいという生徒は全体の約４分の３にまでのぼった。一方，生活の拠点として海外を選ぶ生徒は半数以下になる。この理由（資料２）については，日本への満足感，安心感から来るものも少なくないが，多くは不確定な情報による海外の治安への不安が一方的に先行しているからである。どれくらいの頻度でテロが起きているか等の正確な情報について知っている生徒は少なく，「外国＝危ない」という固定観念があると思われる。

社会科観点	関心意欲	思考判断	資料活用	知識理解
大山口中１年	85.4	49.1	65.3	66.1
県平均	80.8	49.4	58.7	61.5

表１　標準学力テスト　昨年度の大山口中学校１年生の結果

昨年度の一学年は，夏休みの宿題で外国の国調べ新聞を作成している（資料３）。これは生徒が任意の国（日本以外）について新聞にまとめるものである。一学年の時に世界地理を学習し，調べ学習もしていることから海外への興味・関心は低くはない。また，現代はテレビの情報番組やインターネットの普及にともない，中学生でも多くの情報を簡単に得られる時代である。インターネットに関しては，たくさんの危険やトラブルをはらんでいる一方，情報を得るにはとても便利なツールであり，自分の興味・関心のあることについて様々な情報を簡単に得ることができる。そこで，２年後に母国で開催されるオリンピック・パラリンピックを題材にし，調べ学習を行い，外国に関する正確な情報を調べることが必要であると感じた。

外国について，主体的に調べることで，国際社会への興味関心を高めさせるだけでなく，いずれは国際社会で活躍できる生徒になって欲しいという思いを込め，本研究主題を設定した。

アンケート内容	そう思う	思わない
海外旅行に行ってみたいと思いますか	75%	25%
海外で生活してみたいと思いますか	30%	70%

表２　海外に関するアンケート結果

（４）オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議から

文部科学省が発表したオリンピック・パラリンピック教育の推進に向けての最終報告では，次のように述べられている。

> さらに，平和でより良い世界を構築する時代の若者の育成の観点から，オリンピック・パラリンピックを我が国の社会全体や地域の課題，さらには国際社会の状況や現代的な課題に向き合うきっかけとすることも大切である。（中略）こうした力を身につけることは，これからのグローバル化が進み，変化の激しい時代を生き抜いていくために，今後ますます重要になる。

英語教育の充実や，国際理解教育の推進など，中学校現場でもグローバル化に向けた取り組みを加速させている。中学校の社会科として，特に今回は自国開催であるオリンピック・パラリンピックという世界的な社会的事象（イベント）を取り扱うことは好機であると考えられる。国際社会への興味・関心を高めることで，これからのグローバル化が進み，変化の激しい時代を生き抜いていくために必要な資質（自ら課題を見つけ，解決するために調べる能力）を身につけられるよう指導していきたい。

3　教材について

第３２回夏季オリンピック・パラリンピックは，２０２０年７月２４日から８月９日まで東京で開催される。東京での開催は１９６４年以来５６年ぶり２回目で，アジア初の同一都市による複数開催となる。開催までおよそ２年となり，その情報はメディアでもとりあげられ，生徒も日々耳にしている。

昨年度の一学年の生徒の多くが，東京オリンピック・パラリンピックに興味をもっており，開催された際にはオリンピック・パラリンピックを見に行ってみたいという生徒も多く見られた。

２０１６年９月に，リオデジャネイロオリンピック女子ウェイトリフティング５８ｋｇ級で５位入賞を果たした安藤美希子選手は，白井市出身で市内中学校卒業生であったため，本校で講演会を行っていただいた。これは，生徒にとってオリンピック・パラリンピックを身近に感じさせた要因の１つであると考えられる。これらのことから，オリンピック・パラリンピックを教材にすれば，生徒が興味・関心をもって取り組むことができると考えた。さらに千葉県から近い東京で，オリンピック・パラリンピックが行われることで，本研究においてこの教材を用いることが有効であると考えた。

4　研究目標

世界的に有名かつ身近な社会的事象を，問題解決的な学習方法の調べ学習を用いて学び，それらをまとめることで，国際社会への興味・関心が高まることを明らかにする。

5　研究仮説

〈仮説１〉　東京オリンピック・パラリンピックについて調べることで海外の国に関する興味・関心が高まるであろう。

〈仮説２〉　世界的に有名かつ身近な社会的事象について，問題解決的な調べ学習を用いて学ぶことで，生徒の関心・意欲が高まり主体的に学習する態度が身につくであろう。

6　研究方法と実践

（１）問題解決的な学習について

「問題解決的な学習」はデューイの経験主義にもとづき，生徒が自発的に学習問題を捉えて，これらを追究し解決していく学習である。「問題解決的な学習」は，これまでの学習指導要領総則の中で示され，「確かな学力」を身につけるうえで，重視されているものである。

社会科での問題解決的な学習においても「つかむ」→「予想する」→「調べる」→「まとめる」→「深める」の流れで授業を行うことは，非常に有効的な手段である。本研究は，問題解決的な学習の流れにそって段階を追って進んでいくことで，社会科に興味・関心がない生徒にも見通しをもってわかりやすいよう工夫してとりくんだ。

（2）調べ学習について

本研究は，地理の教科書（「新しい社会　地理」東京書籍）の第４章「世界のさまざまな地域の調査」の内容を差し替えて行うものとする。

本研究では，調べ学習を行い，新聞にまとめるまで，問題解決的な学習にそって５つのステップを設定した。

A【つかむ】　どれだけ知っている？オリンピック・パラリンピック!

↓

B【予想する】　オリンピック・パラリンピックは知らないことだらけ？

↓

C【調べる】　オリンピック・パラリンピックについて調べてみよう！

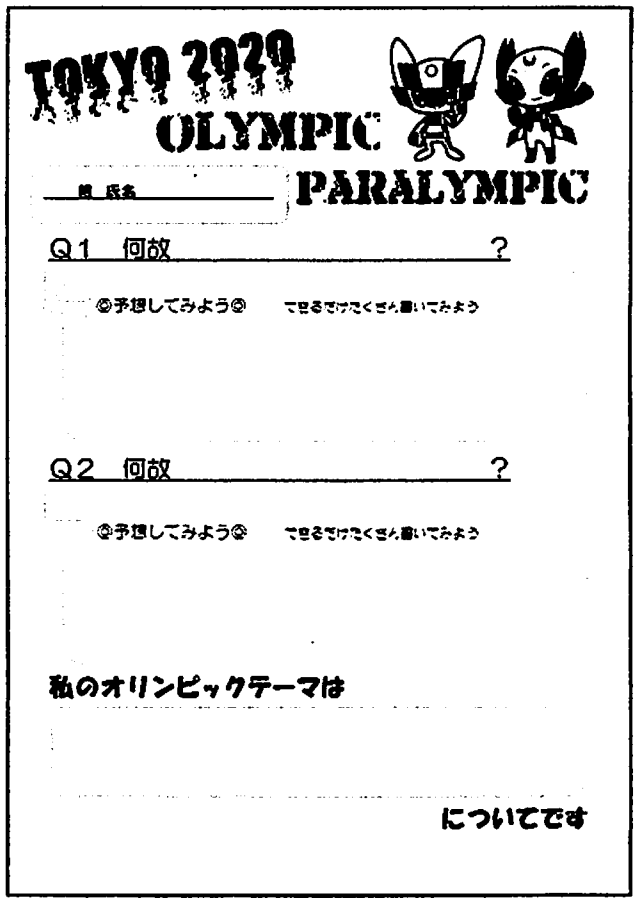
↓

D【まとめる】　オリンピック・パラリンピック新聞をつくろう！

↓

E【深める（つかむ）】　実は知らないオリンピック・パラリンピック！

A【つかむ】どれだけ知っている？オリンピック・パラリンピック



オリンピック・パラリンピックについて，生徒が「知っているようで意外と知らない」という点に気づけるよう，

「①なぜオリンピックは開かれるのか？」

「②なぜ東京でオリンピックが開催されるのか」というあえてオリンピック・パラリンピックについての根本的な質問を設定した。

「①なぜオリンピックは開かれるのか？」という質問に関しては，「他国との仲をよりよくするため」や「スポーツで一番を決めるため」などの解答が多く見られた。国際交流やスポーツに関することについての考えをもつ生徒が多く，オリンピック・パラリンピックそのものについて興味・関心は高いように感じた（資料４）。

一方でオリンピック・パラリンピックを開催するにあたり，最大のテーマである「平和の祭典」等の国際平和に関する記述は少なかった。展開の中で，「世界陸上やワールドカップがあるのに，全競技を一度に開催する必要がありますか」という発問をすることで，題材についての深まりにつながり，より生徒がオリンピック・パラリンピックについて考えられるようになった。

「②なぜ東京でオリンピックが開かれるのか？」という質問については，東京（日本）で開催するこ

とについて，なぜこれほど日本中が盛り上がっているかという疑問について議論させた。

東京にオリンピック・パラリンピック誘致が決まった際，フリーアナウンサーの滝川クリステルや元フェンシング日本代表の太田雄貴選手が大喜びする姿の映像を授業の導入で見せることで，東京でオリンピック・パラリンピックを開催することを望んでいる人が多くいたことを意識付けさせた。生徒の意見では「日本をアピールするため」や「日本の文化を外国人に味わってもらいたい」などの〈日本をより知ってもらうために〉というものや，「他の国より発展しているから」，「治安がいいから」など〈自国への自信〉が見られる意見も出た。「観光客が増え，日本のためになるから」といった意見も見られた。しかし，観光客が増えることが，「なぜ日本のためになるのか」という経済的視点や，メリットだけでなく，オリンピック・パラリンピックを開催するに当たってのデメリットや問題点を考えられる生徒は少なかった。

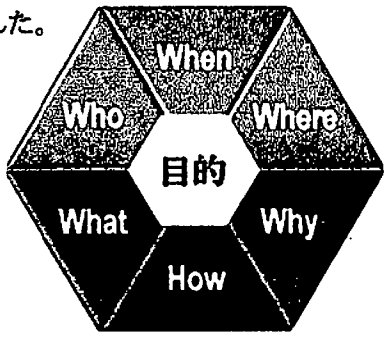
展開の中で「【日本】でなく，【東京】で開催する理由はなんだろうか？」という発問をすることで，オリンピックが私たちの住む千葉県の身近で開催されることをより意識させることができた。また，「オリンピック・パラリンピックを自国で開催することは本当にいいことなのか」という発問をすることで，より生徒がオリンピック・パラリンピックについて疑問をもち，興味・関心を高めることとなった。

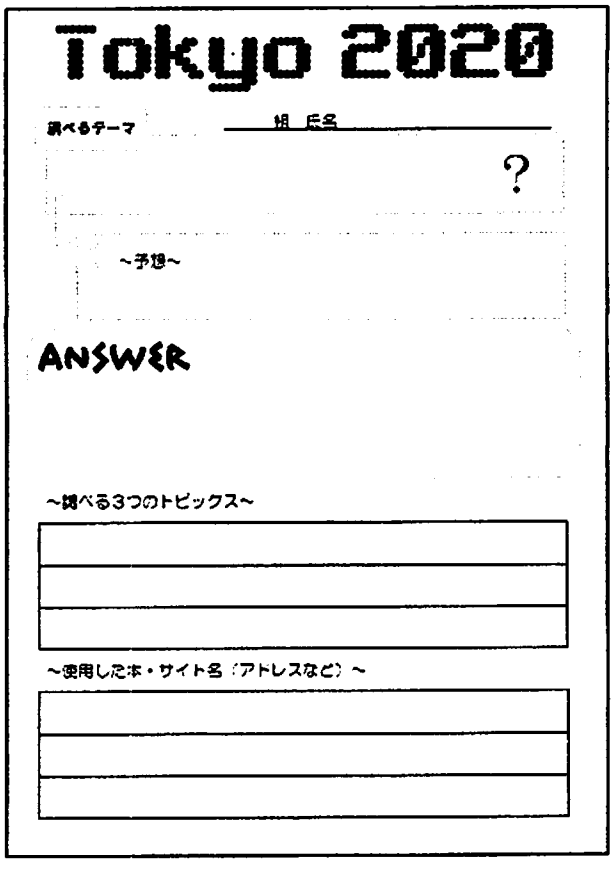
上記２つの質問や友達の意見を聞く中で，オリンピック・パラリンピックについて知っているようで，意外と知らないことに気づかせる。そして，本時の展開の中で一番自分が興味がわいたテーマ（歴史や開催地，エンブレム等）を１つ選定する。

B【予想する】オリンピック・パラリンピックは知らないことだらけ？

前時の展開で決定したテーマをもとに，自分なりの〈５Ｗ１Ｈ〉を使用した疑問をたてる。（資料５）

例えば，開催地について興味をもった生徒は「何故，毎回開催地は変わるのだろうか」や「開催地はどうやって決まるのか？」などの自分が知りたいことについての疑問をたてる。その疑問に対して，自分で一度予想をすることで，その後に正解を知ったとき，自分の考えと比較できるようにした。自分の予想をもとに調べ学習を行うことで，自分の予想が正しいのか，間違っているのかを早く知りたがる生徒の姿も見られ，調べ学習への意欲向上にもつながった。自分の予想がほぼあっていたことに驚きをあらわす生徒や，全く予想をしなかった事が真実ということを知り，そこから考えをふくらます生徒など様々な姿が見られた。




Tokyo 2020

調べるテーマ　　班　氏名

?

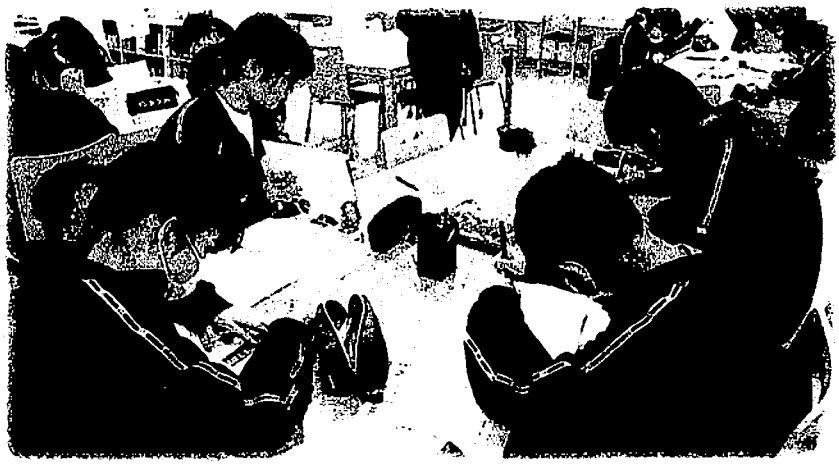
～予想～

ANSWER

～調べる３つのトピックス～

～使用した本・サイト名（アドレスなど）～

C【調べる】　オリンピック・パラリンピックについて調べてみよう！



B【予想する】で書いた予想を調べるため，学校の図書室にある本を中心に調べていく。

基本的には図書室にある資料で調べ学習を行うことが望ましいが，本に書いてある内容だけでは調べきれない内容に関しては，自宅でパソコン等を使用し，インターネットで調べてくるよう指示した。

調べた内容を軸に，今後はそのテーマに関連する３つのトピックスを選定させた。３つのトピックスとは，調べた答えの詳細や，新たに自分が見知った知識など，次の展開でまとめる新聞の見出しになるようなものとした。例えば，なぜ春や秋にはやらないか？」というテーマの予想が「季節がスポーツに適していないから」であった。しかし，実際の答えが「アメリカのＮＢＣテレビの視聴率を高くするためにアメフトなどのアメリカのメジャースポーツと季節をずらすため」という場合，調べる３つのトピックスは「①第一回オリンピックは春に行っていた！」「②昔は長期にわたって開催していた！」「③冬季オリンピックが開催された理由」というものになる。このように自分のたてたテーマにそって関連するトピックスを３つあげることで，幅広い知識の充実をはかり，１つの調べ学習を行うことで，様々な方向があることを確認させた。

～読書活動推進教員との連携～

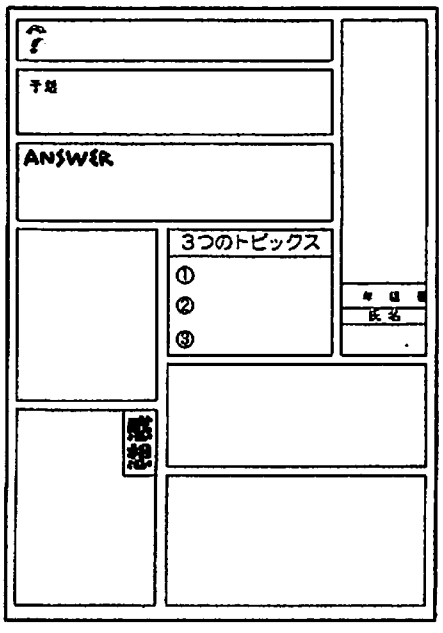
もともと中学校図書室にある，東京オリンピック・パラリンピックにある資料のみでは，１クラスの生徒（約３０名）が一斉に調べ学習を行うことは不可能であった。そこで，学校の読書活動推進教員と連携し，近隣の中学校から関連の資料を取り寄せていただき，また，調べ学習を実際に行った際は，生徒に本の紹介や調べ方をアドバイスしてもらった。（資料６）

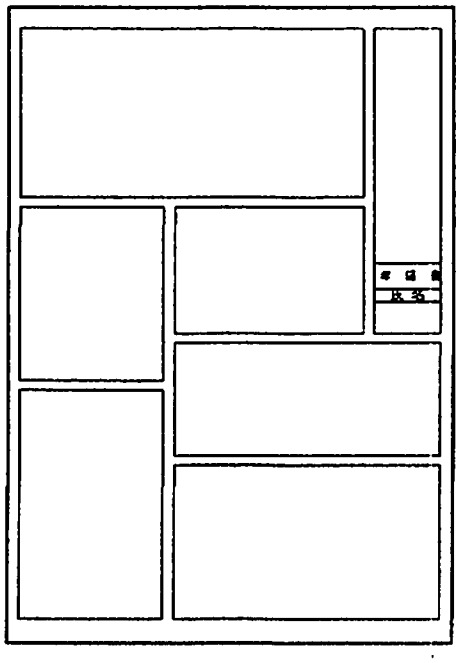
D【まとめる】　オリンピック・パラリンピック新聞をつくろう！

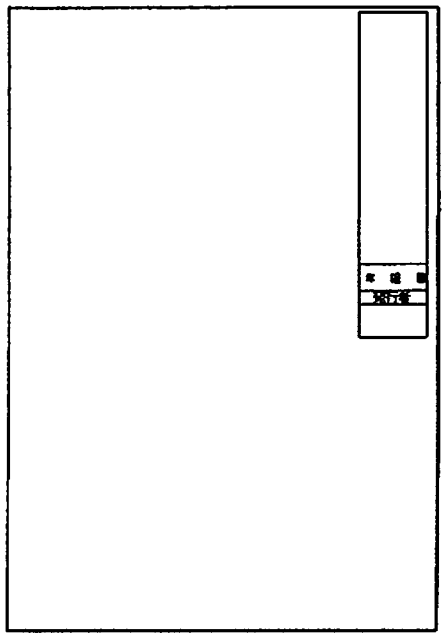
まとめる新聞については，以下の３種類の新聞を用意し，生徒に自由に選ばせた。

一番左の新聞が，作業が苦手な生徒でもとりかかりやすいタイプのもので，項目に沿って埋めていくことで必要な情報を得られるようにした。中央の新聞は，ある程度生徒に自由をきかせ，一番右のタイプの新聞がよりフリースタイルな新聞である。

生徒の中で一番人気のあったのは中央のタイプの新聞であった。ある程度枠が決まっていて，そのなかでも自由がきくことが大きな要因である。それに加え，１年時の夏休みの課題であった外国の国調べ新聞と同じ書式であったことが要因としてあげられる。それでもその他２つのタイプの新聞を選んだ生徒数とは大差はなく，３種類とも比較的同程度の枚数であった。







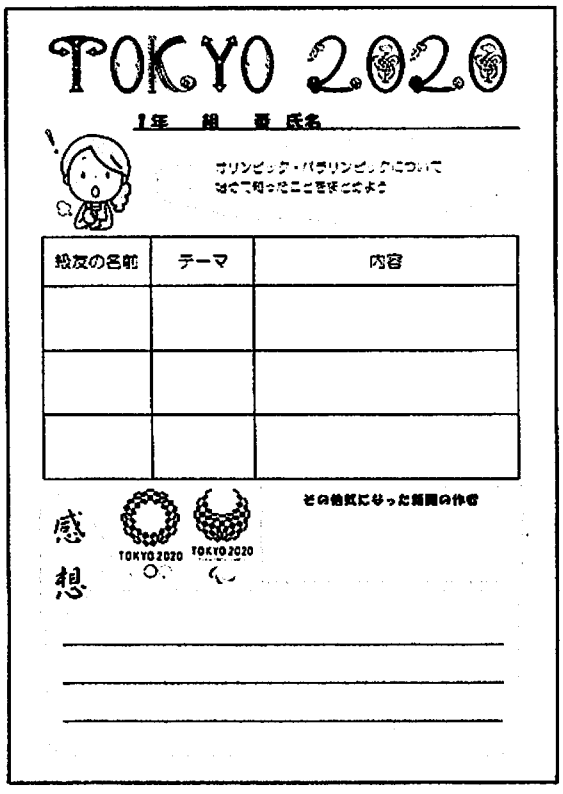
E【深める（つかむ）】　実は知らないオリンピック・パラリンピック！

オリンピック・パラリンピックについてまとめた新聞をもとに，クラス単位での調べ学習を行った。自分の新聞を自分の机の上に置き，ある程度の時間，自由にクラスメイトの新聞を読む時間を設けた。

クラスメイトが調べた新聞を読んで，自分が初めて知ったことについてまとめることで，知識の幅に広がりが見られた。また，自分と同じ，似たようなテーマの作品でも，自分が調べたこと以外の知識を得ることで，更なる興味・関心へとつながった。（資料７）

また，級友の新聞を読んで新たな知識を習得し，新たな疑問を感じることで，また【つかむ】こと

ができ，問題解決的な学習のサイクルへとつながった。生徒の中には，級友の新聞からの新たな課題を発見し，深めていきたいという感想も見られた。


TOKYO 2020

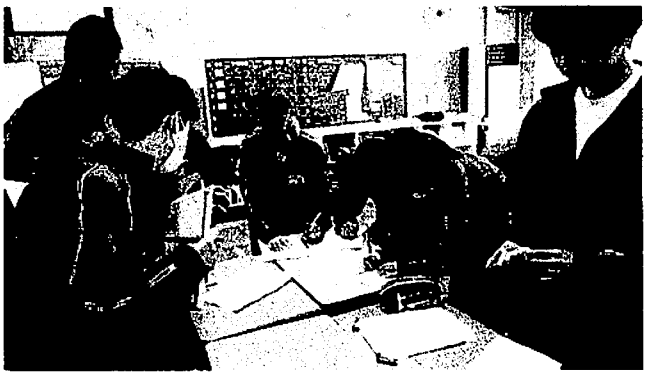
1年　組　番　氏名

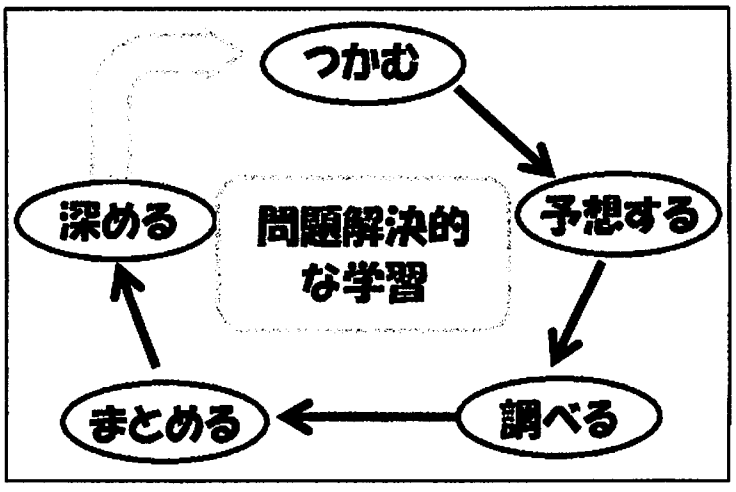
オリンピック・パラリンピックについて
はじめて知ったことをまとめよう

級友の名前	テーマ	内容

感想

その他気になった新聞の作者





「オリンピック・パラリンピックについて調べよう」全５時間展開

時間	学習内容	指導・支援　○評価
1 ～つかむ～	オリンピック・パラリンピックについて ・オリンピック・パラリンピックに関する映像を見る。 ・なぜオリンピックがあるのか，またなぜ今回日本で開催されるかについて考え，発表する。 ・オリンピックの歴史や，開催条件など自分が興味のあるテーマを選定する。	・オリンピック・パラリンピックについての発表を板書し，オリンピック・パラリンピックについて様々な視点をもたせる。 ・東京オリンピック・パラリンピックのみならず，歴史や今後のことも視野にいれさせる。 ○オリンピック・パラリンピックについて自分の考えを発表しようとしている。【関心・意欲・態度】
2 ～予想する～	オリンピック・パラリンピックは知らないことだらけ？ ・前時の授業で決めたテーマについて，わからないことや疑問に思ったことを1つメインテーマとして決める。 ・決まったメインテーマをもとに，自分なりの予想をする。	・机間指導をし，すでに答えを知っているものや，答えが見あたらなそうなものは避けるようにする。 ○社会的事象における疑問に対して自分なりの予想をすることができる【思考・判断】

3 ～調べる～	オリンピック・パラリンピックについて調べよう ・以前予想したメインテーマを図書室の本やインターネットなどを使って調べていく。 ・メインテーマにしたがってそれに関連するトピックスを3つ選定する。	・班員と協力して，自分の調べたい本や資料をさがさせる。 ・図書室の本だけで調べきれない場合は，パソコン室や自宅で調べさせる。 ○資料をみながら意欲的に調べようとしている【関心・意欲・態度】 ※読書活動推進教員に協力をしてもらい，図書室で調べ学習をする。
4 ～まとめる～	オリンピック・パラリンピック新聞をつくろう ・調べた内容を新聞にまとめる。	・机間指導を行い作業が進まない生徒に積極的に声かけをする。 ○資料から読み取った情報を新聞にまとめることができる。【技能】
5 ～深める～ （つかむ）	実は知らないオリンピック・パラリンピック！ ・作った新聞を机上におき，クラスメイトの新聞を閲覧する。 ・クラスメイトの新聞をみて，初めて知ったことをプリントにまとめる。 ・オリンピック・パラリンピックについて調べたことなどの感想をかく。	・自分と同じ，または似たトピックス，テーマについて調べたクラスメイトの新聞にも着目させる。 ○クラスメイトの新聞から新しい情報をえることができる。【知識・理解】

7　仮説の検証

（1）仮説１について

東京オリンピック・パラリンピックについて調べることで海外の国に関する興味・関心が高まるであろう。

オリンピック・パラリンピックについての調べ学習を行うことで，外国への興味・関心が高まると考えたが，それを有意なデータや感想は得られなかった（表３）。新聞を作るにあたり，生徒がそれぞれ調べるテーマは【①オリンピック・パラリンピックそのものに関する疑問】【②オリンピック・パラリンピックの競技に関する疑問】【③東京オリンピック・パラリンピック 2020 に関する疑問】の３つに大きく分かれた。①では，オリンピック・パラリンピックの意義や名前の由来，運営組織，エンブレム，

アンケート内容	そう思う	思わない
海外旅行に行ってみたいと思いますか（学習前）	75%	25%
海外旅行に行ってみたいと思いますか（学習後）	78%	22%
海外で生活してみたいと思いますか（学習前）	30%	70%
海外で生活してみたいと思いますか（学習後）	30%	70%

表３　海外に関するアンケート最終

歴史，年数（4年に1度），開催地，聖火リレーについてなどがあげられ，これに関連するテーマを選択した生徒が一番多かった。②ではメダルの種類や，新競技，競技場などの疑問があげられる。③では東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まった経緯や競技場，収支予測などの疑問があげられた。

これに対し，以前のオリンピック・パラリンピックの開催地や，海外の有名選手を調べる生徒はほとんど見受けられなかった。もちろん，外国に焦点をあてて調べている生徒も若干名おり，また，少なからず今回の新聞作成で国際的な考えを養うことはできたが，国際社会への興味・関心につながったかどうかは不明瞭である。

これらの原因の1つとして，オリンピック・パラリンピックを扱う際，国際社会での社会的事象の中でも，「東京」，すなわち日本国内で行うといった，極めて希なケースに行われたことが考えられる。導入プリントの2つ目の発問（なぜ東京でオリンピックをやるの？）など，日本国内に目を向けさせるような発問が，生徒が国内で行われる社会的事象において内向きにしか考えられなかった要因の1つであろう。違った導入の方法（見せる映像の内容の厳選）や発問の工夫，また，外国でのオリンピック・パラリンピックと，今回の東京オリンピック・パラリンピックの比較や，外国人観光客数の推移や予想にも目を向けられると，今回の研究の幅が，より広がったのではないかと考える。

（2）仮説2について

世界的に有名かつ身近な社会的事象について，問題解決的な調べ学習を用いて学ぶことで，生徒の関心・意欲が高まり主体的に学習する態度が身につくであろう。

生徒の感想より～オリンピック・パラリンピック学習を終えて～

- 友達に教えてあげたいたくさんの知識を知ることができた。
- 次のオリンピック・パラリンピックの際は家族に説明しながらみたいとおもう。
- 皆の新聞を見て，自分の知らないことがわかり，オリンピック・パラリンピックに興味がでた。
- （年齢制限を知って）オリンピック・パラリンピックに自分も出場できることを知り，自分もオリンピックに出場したいと思った。
- 身近で開催されるオリンピック・パラリンピックを実際に見に行きたくなった。
- 本を使って調べることのおもしろさを感じた。
- パラリンピックについて調べることで，障がいがある人々の活躍が知れてよかった。
- 今までパラリンピックの意味が分からなかったが，調べることで意味を知り，世界の多くの障がい者も私たちと同じように頑張っている事を知れてよかった。
- みんなの新聞を見て，オリンピックにはたくさんの人が関わっていたり，支援があったり，たくさんの人が手伝い，成り立っている事がわかった。
- 自分で調べたことはわかっていたけれど，まだまだ分からない事が多いので今回を機会に，もっと調べてみようと思った。
- 次のオリンピックは前と違う「平和の祭典」という視点で見たいと思う。
- もっと平和な世界を目指したいと思った。

アンケート内容	そう思う	思わない
東京オリンピック・パラリンピックに興味がありますか（学習前）	69%	31%
東京オリンピック・パラリンピックに興味がありますか（学習後）	92%	8%

表4　東京オリンピック・パラリンピックへの興味関

オリンピック・パラリンピックについて学ぶことで国際社会への興味・関心が上がった事を示すデータは不確かなものであった。しかし，問題解決的な学習を行うことで，社会科が苦手な生徒や調べ学習などの取り組みが苦手な生徒の関心・意欲が高まり，主体的に学習することができるようになった。

以上の感想にもあるように，自分で新聞をまとめることで，「オリンピック・パラリンピックについて，知らないことが多かった」という内容の感想をもつ生徒が非常に多かった。問題解決的な調べ学習を行うことで，社会的事象そのものに対する興味・関心を高めることができた。（表４）それに加え「自分の疑問を実際に本やインターネットで調べること」について面白さを見出した生徒も多くいた。自分の身の回りの疑問を主体的に解決する楽しさを感じることができた。また，クラスメイトの新聞を読むことで，新たな知識を獲得し，興味・関心を高めることができた。

今回の新聞作りは，夏休みの課題であった「外国の国調べ新聞」に比べて限られた時間の中での作業となったが，ほとんどの生徒が提出することができた（資料８）（資料９）。理由としては，①調べ学習前に段階をおって準備をしたこと。②３つのタイプの新聞を生徒が自由に選択できるようにしたことがあげられる。さらに社会科が苦手な生徒や新聞作成などが苦手な生徒でも，形式の定まっているタイプの新聞を使用することで，色使いまで丁寧に行うことができた。

８　成果と課題

【成果】

○問題解決的な学習方法を用いて東京オリンピック・パラリンピックについて調べ学習を行うことで，問題解決的な学習のサイクルが生まれ，社会的事象に対しての興味・関心が高まった。

○新聞のまとめ方を工夫することで，社会科やオリンピック・パラリンピックに関心がない生徒，また調べ学習やまとめるのが苦手な生徒でも短時間で意欲的に取り組むことができるようになった。

○1964年の東京オリンピック・パラリンピックについて学ぶことで，３学年公民で行う高度経済成長の学習への興味・関心が高まった。

○オリンピック・パラリンピックの起源について調べることで，世界平和について考えるきっかけになった。

○パラリンピックについて調べることで，障がい者理解へとつながった。

○読書活動推進教員と連携することで，生徒が様々な資料に短時間でふれることができ，調べ学習がはかどった。

【課題】

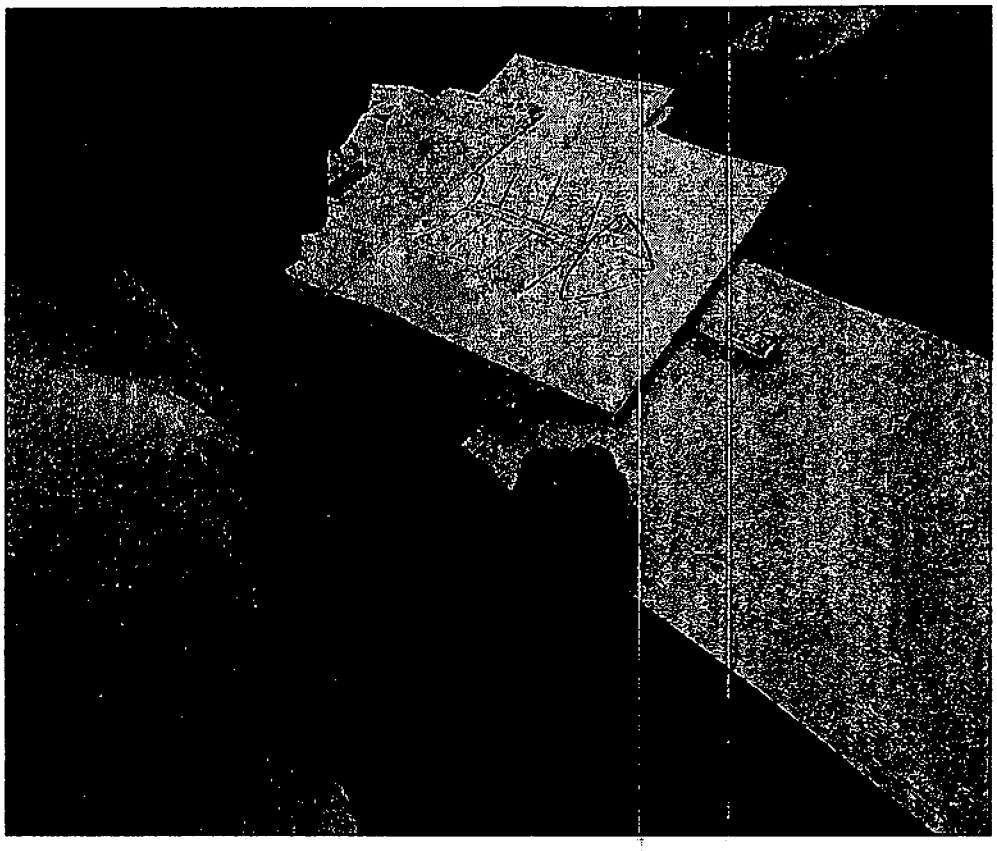
△国内で行われた国際的な社会的事象においても，導入や発問の工夫，またアンケート内容を検討することで，国際社会への興味・関心が高まる方法を模索していき，変化に柔軟に対応・行動できる力を身につけさせていきたい。

△本などの資料に加え，パソコンやタブレット端末など，時代に則したＩＣＴ教材を使った調べ学習が望まれる。

△本研究を活かすためにも，今後，身近な社会的事象（ロシアワールドカップなど）について授業でとりあつかっていくことで，社会的事象への興味・関心をさらに高めていきたい。

第６８次印旛地区教育研究集会
（社会科教育・中学校）

まとめあげる力を育てる
社会科学習の在り方



四部会八街中学校
石　澤　　孝　明

1　研究主題

まとめあげる力を育てる社会科学習の在り方

2　主題設定の理由

（1）現代社会の要請から

現代社会は，ＡＩの技術が著しく発展しており，ＡＩの進化のスピードを予測するのが難しいほどの勢いである。今後２０年間で，現在ある仕事の４０％がなくなるという研究の結果もある。情報化やグローバル化が人知を超えて加速度的に進展している現代では，子供たちが就く職業やどういった人生を歩むのかが予測不能であることも問題視されている。中学社会科教育の現場では二年後に向けて，大学受験改革のアクティブラーニングなどの活用，千葉県公立高校入試前期後期の一本化，記述問題重視などにむけても「まとめあげる力」は重要視されている。真に知識を理解し，それらを活用する力が求められている。

（2）学習指導要領から

平成29年3月に告示された中学校学習指導要領総則では，「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力等を育むとともに，主体的に学習に取り組む態度を養い，個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。その際，生徒の発達の段階を考慮して，生徒の言語活動など，学習の基盤をつくる活動を充実するとともに，家庭との連携を図りながら，生徒の学習習慣が確立するよう配慮すること。」とある。

指導要領の改訂のポイントの一つに，『知識の理解の質を高め資質・能力を育む主体的・対話的で深い学び』があげられる。これまでの教師主導の授業ではなく，生徒自らが学びを追求する主体的な活動が必要とされている。そして，互いの考えをまとめたことを確認・発表し，対話的な活動へとつなげ，より深い学びを実現していかなければならない。これまでの社会科の授業では，知識を理解させ教え込む形の授業が多く，生徒が受動的になってしまうことが多かった。情報化が進む現代では，インターネット等ですぐに検索し，答えをみつけることができる時代となっている。だからこそ，これからの学習では，習得した知識をどう判断し，どのように活用していくかが必要とされている。

また，注目すべき改訂のポイントとして，『学習の基盤としての各教科等における言語活動（実験レポートの作成，立場や根拠を明確にして議論することなど）の充実』がある。社会科で実践していく活動が，他の教科にもよい影響を与え，言語活動が充実していけるようにしたい。

そこで本単元は，学習指導要領歴史的分野の目標及び内容を受けて設定している。

> 目標（1）我が国の歴史の大きな流れを，世界の歴史を背景に，各時代の特色を踏まえて理解するとともに，諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身につけるようにする。
>
> 内容　B　近世までの日本とアジア
>
> （3）近世の日本
>
> （イ）江戸幕府の成立と対外関係
>
> （ウ）産業の発達と町人文化
>
> （エ）幕府政治の展開

以上の学習指導要領の目標をふまえ，諸資料をもとに調べまとめる技能に重点を置き，「深い学び」を四部会社会科として，本研究に取り組んでいきたい。

（3）印教研研究主題から

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習
～自ら課題を見出し，自らの考えを表現できる児童生徒の育成をめざして～

印教研研究主題である「生きる力」とは，自ら課題を見出し，その課題解決へ向けて自らの考えをもち，表現できる力のことである。印教研社会科研究部において，これまでにさまざまな授業実践，授業改善が行われてきた。しかしながら，中学校の社会科の授業では，指導者が課題を提示し，主導しながら，まとめへと導いており，受動的な学習が行われてきた。それらの現状を打開すべく，自ら考え，まとめあげる活動を実践していく中で，「自らの考えを表現する生徒」を育んでいきたいと考えた。

（4）生徒の実態から（2年3組　36名）

4月最初の授業の際に，本学級の生徒を対象に社会科アンケートを行った。「社会科が得意ですか」の設問においては，「そうである」など好意的な意見は9名で「不得意」と答えたのは１２名であった。「そうである」と答えた生徒の多くは「点数がとりやすい」「暗記が得意だから」という理由で，「歴史認識における面白さや楽しさ」を感じているわけでない。「不得意」と答えた生徒の理由には，「覚えることができない」「点数がとれない」が多かった。このことから『社会科＝暗記教科』として生徒が認識していることがわかる。以前，定期テスト前に，「先生，そのまま丸暗記してくるので対策プリントをください」と発言した生徒がいた。この言葉には衝撃を受けた。

次に「学んだことをまとめることができますか」の設問においては，「得意である」「まあまあ得意である」など好意的な意見は8名で，その理由は「テストで問われた時に正解を書くことができ点数が取れる」「作文や新聞など文章を書くのが得意だから」等の回答が多く，「歴史が好きで興味がある」と答えた生徒は１名であった。「ふつう」と答えたのは１０名であった。また，「あまり自信がない」「苦手である」と答えた生徒は，14名であった。その理由は「歴史に興味がない。やる気がおきない」「どのようにまとめ，どこから書けばよいのかわからない」「ついつい長くなってしまい，まとめている感じがしない」「自分が書いていることが合っている自信がないから」「頭が悪いから」等の答えであった。2年3組の生徒は，学んだことをまとめることが得意だと感じている生徒もそうでない生徒も，歴史に対し，興味や関心をいだくことができていないことがわかる。今後は，今までの取り組みで反省すべきところを改善し，生徒達の興味・関心を引き出していけるようにしたい。

また，アンケートでは，小学校，中学校1年次での既習事項を『自分の言葉で書くことができるのか』についても調べた。設問によっての差はあるものの，小学校で学習し，中学校で再度学習した内容でさえ，なかなか上手に説明ができない。ただ単に文章を書くことが苦手なだけではなく，知識を忘れてしまっていること等が考えられる。これは，国語的なまとめる力も関わるが，社会科のまとめは，社会事象と社会事象を比較したり，関連づけたりしなければならないため，生徒にとっては複雑となることが原因であると考えられる。

以上のことから，生徒は社会科の中でも「自分の言葉でまとめること」を課題としている生徒が多く，歴史的な事実を正確に理解できているとは程遠いのが現状である。今回の設問において，内容が合っていない，全く書けていない生徒が多かったのだが，取り組みを行っていくなかで，書ける生徒の層を厚くしていきたい。内容が不完全であったとしても，学級において書ける層が増えていくことで，「まとめあげる」取り組みの段階をあげていくことができると考えている。

事前アンケート（平成３０年度４月１６日実施　対象：２年３組生徒３２名）

	○ （内容があっており，読み手に伝わる文章になっている。）	△ （内容が不完全であったり，伝えたいことがわかりにくい。）	× （何も書けなかった生徒の数）
◎現代の主食が米だけでなく多様化してきたのはなぜだろう？	２１名	１名	１０名 （５名）
◎武士が政治の中心となっていったのはなぜだろう？	７名	２名	２３名 （１４名）
◎なぜ，江戸時代，オランダとの貿易は“出島で行うこと”と制限されたのだろう？	５名	１名	２６名 （２１名）

3　主題について

まとめあげる力とは

前述のとおりであるが，本単元において，「まとめあげる力」とは，『生徒自らの力で歴史的事象と歴史的事象を繋げ，学習課題に対しての答えを導き出す力』と本研究では定義する。

従来のまとめは，教師がまとめたり，優秀な生徒に発言させたりしてまとめることが多かった。このことを反省し，教師の手立てによって生徒がもてる力を発揮し，まとめあげることができるようにしたいと考え，このように定義した。必要な情報を取捨選択し，自らの言葉でまとめあげることで，自分の考えや，学習への答えに自信が持てるはずである。『まとめあげる』という言葉には，ただ「まとめる」のではなく，「完成させる」という意味を持たせている。生徒が自信を持って自分の考えを表現できるよう，『まとめあげる』ことができるようにしていきたい。

4　研究の目標

興味・関心を高める学習課題を設定し，その解決に向けて，さまざまな資料を提供し，自らの考えをまとめげていく。また，まとめあげるためのさまざまな手立てを繰り返し実践していくことが，まとめあげる力の向上に有効であることを，実践を通して明らかにする。

5　研究の内容と方法

【　研究内容　】

・学習課題から自ら答えをまとめあげようとする態度の変容。

・授業手立ての工夫により，まとめあげる力はどう変容したのか。

【　研究方法　】

・まとめの記述を分析する。

・実態調査の変化と抽出生徒の変容から考察する。

6　研究の仮説と手立て

【仮説１】

学習過程（学習問題・予想・調べ・まとめ）を工夫すれば，生徒自らまとめあげようとする力が高まるだろう。

手立て①　学習課題の工夫

学習課題が，生徒の興味・関心，学習意欲を喚起するような内容であれば，自ら調べまとめようとする意欲も高まるはずである。

例「なぜ，九十九里で大量にイワシが水揚げされたことが，人々の衣類の変化へとつながっていくのか」

「“旅の始まり”と呼ばれる江戸時代。江戸時代の旅はどのようなものだったのだろうか」

「越後屋はどのような商売の方法で人々の心をつかんだのだろうか」

「江戸時代の㋥㋦㋑㋒㋤から，現在の生活でも実践できるものはないだろうか」

など『歴史的認識＋地理的認識』，『歴史的認識＋現代社会的認識』など組み合わせることで，より深い社会認識が考えられるきっかけを与えられると考えた。

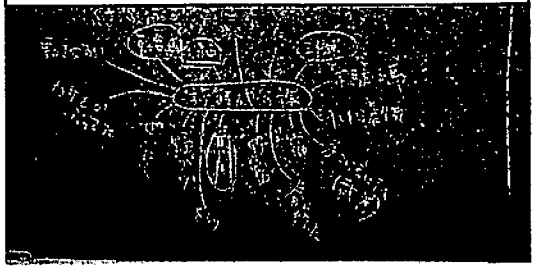
手立て②　予想の時間の確保

予想を立てるだけでなく，互いに発表し合い，予想も自らの考えを深める場としたい。多面的な予想が出てくることで，学習意欲はさらに喚起されていくと考えられる。

手立て③　予想の段階でイメージマップを用いて思考を拡散させる。

イメージマップを使用しての予想を立てる。中心となる語句から，自由に発表させ，イメージをふくらませていく。これを活用した場面では，なるべく全員が発表できるようにする。

「“旅の始まり”と呼ばれる江戸時代。江戸時代の旅はどのようなものだったのだろうか」



手立て④　調べ学習における資料の精選

現段階では，指導者が予想しうるねらいを達成できるための資料を精選する。今回の研究は，歴史的事象と歴史的事象をつなぎ合わせ，まとめあげる力を育成したいと考えている。情報を取捨選択していく力も必要であるが，今回は，まとめあげることに重点を置いていくので，資料を精選していく。資料を精選することで，まとめる事象を把握しやすくなると考えている。

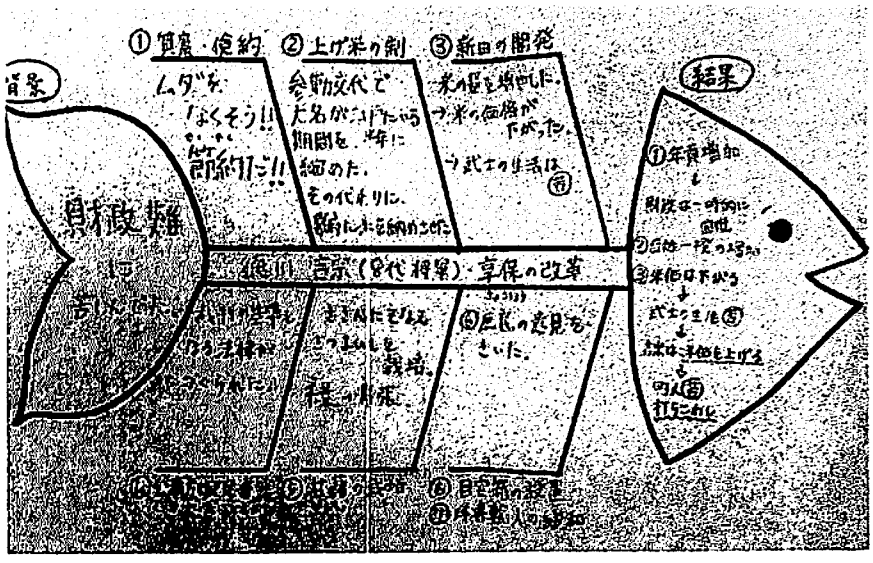
【仮説２】

歴史的事象と歴史的事象を関連づける授業手立てを工夫すれば，思考が整理されまとめあげる力が育つだろう。

手立て⑤　まとめの段階で思考ツール“フィッシュボーン”を用いて思考を収束させる。

享保の改革，田沼の政治，寛政の改革，天保の改革の学習単元での実施を予定している。改革の内容の羅列だけでなく，改革内容をまとめさせ，改革の事前と事後でどのような変化が見られたのかを捉えられるようにしたい。さらに，フィッシュボーンでまとめたものを比較し，共通点や差異点を考えさせることで，歴史的認識を明確にし，捉えさせていくようにしたい。

享保の改革の政策がまとめられたフィッシュボーン



手立て⑥　思考力を問う問題を設定する。

繰り返し，思考力を問う問題を設定し，訓練をしていく。どのような問題を問うかが重要で，生徒の興味・関心を引き出す内容を心がけている。また，まとめあげる際に，キーワードを用いたり，小学生でもわかるように説明するなど，まとめる際の視点を設けることで，生徒はまとめやすくなると考える。

7　授業計画

２節　江戸幕府の成立と鎖国

時数	学習単元	手立て
1	江戸幕府の成立と支配の仕組み	
2	さまざまな身分と暮らし	
3	貿易の振興から鎖国へ	**手立て⑥** **思考力を問う問題の設定** 「ローマ教皇が天正遣欧少年使節を歓迎したのはなぜだろう」
4	鎖国下の対外関係	

３節　産業の発達と幕府政治の動き

時数	学習単元	手立て
1	農業や諸産業の発達	**手立て①** **学習課題の工夫** 「なぜ，九十九里で大量にイワシが水揚げされたことが，人々の衣類の変化へとつながっていくのか」 **手立て②** **予想の時間の確保**
2	交通路の整備と都市の繁栄①	**手立て①** **学習課題の工夫** 「“旅の始まり”と呼ばれる江戸時代。江戸時代の旅はどのようなものだったのだろう」 **手立て②** **予想の時間の確保** **手立て③** **イメージマップで思考の拡散**
3	交通路の整備と都市の繁栄②	**手立て①** **学習課題の工夫** 「越後屋はどのような商売の方法で人々の心をつかんだのだろうか」 **手立て②** **予想の時間の確保** **手立て③** **イメージマップで思考の拡散**
4	幕府政治の安定と元禄文化	
5	享保の改革と社会の変化	**手立て⑤** **フィッシュボーンの活用**
6	田沼の政治	**手立て⑤** **フィッシュボーンの活用**
7	寛政の改革	**手立て⑤** **フィッシュボーンの活用**
8	享保の改革，田沼の政治， 寛政の改革のまとめ	**手立て⑤** **フィッシュボーンの活用**
9	新しい学問と化政文化	
１０	天保の改革	**手立て⑥** **思考力を問う問題の設定** 「ロシアが日本に開国を求めてくる目的は何だろう」
１１	◎江戸のエコ社会 ◎２年生１学期の 歴史学習のまとめ	**手立て②** **予想の時間の確保** **手立て④** **資料の精選**

8　仮説の検証

仮説１の検証

学習過程（学習問題・予想・調べ・まとめ）を工夫すれば，生徒自らまとめあげようとする力が高まるだろう。

検証１　学習問題の工夫による抽出生徒の意欲の変容

学習課題を工夫することで，生徒の興味を高め，文章にまとめようとする意欲を高めることができたと思われる。学習課題を工夫することで，社会科が苦手な生徒ほど，取り組みに普段との違いが表れた。特別意欲的というわけではないが，最後まで集中が保たれ，自分でまとめることができた生徒がほとんどであった。以下の文章は，社会科を不得意，嫌いと感じている生徒や定期テストなどにおいて点数があまりとれていない生徒のものである。

抽出生徒Ａ

どの授業にも落ち着いて参加しているものの，積極性が見られず意欲は低い。提出物は期限内に出している。社会科は苦手。文章を書くのも苦手であり，国語にも苦手意識を持っている。第１回の定期テストでは，平均点を１５点ほど下回った。アンケートでは，「武士がどのように力をつけてきたのか」「出島で貿易を行うこととされたことへの説明」は書けず，白紙であった。

「なぜ，九十九里のイワシ漁が，人々の衣類の変化へとつながっていくのか」

まとめ

イワシがたくさんとれて，干したイワシや油をしぼったカスが肥料となり，綿の栽培が増え，人々の衣類は麻から木綿へと変わっていった。

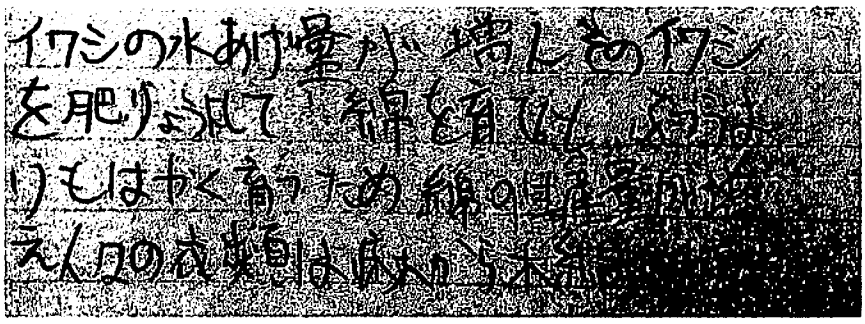
「江戸時代の㋥㋭㋑㋗㋠から，現在の生活でも実践できるものはないか考えよう」

これれてしまった傘のやつなら，現在でも実践できると思います。
その理由は，雨の日などの時に，コンビニの傘立てなどに，これれた傘を入れて，そのままかえってしまうというニュースをみたことがあるからです。
１人１人がこれれてもしっかりもってかえることを意識すればできる，リサイクルだと思います。

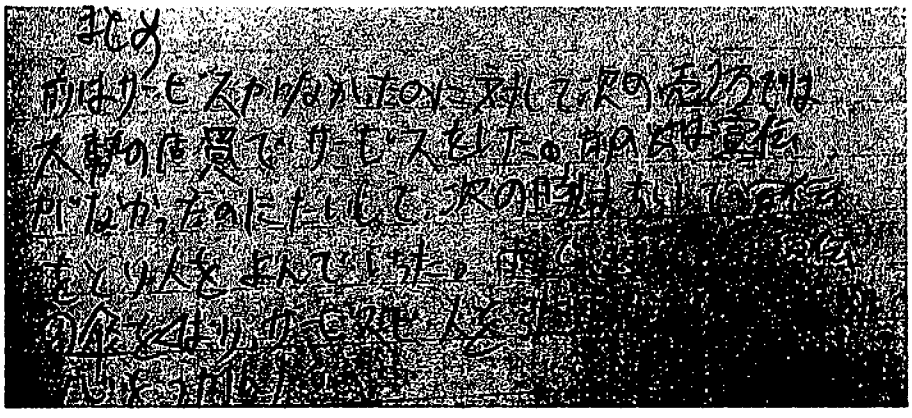
抽出生徒B

学習への苦手意識が強く，意欲は低い生徒。授業中はなかなか集中して取り組むことが難しい。テストの点数もかなり低い。

「なぜ，九十九里のイワシ漁が，人々の衣類の変化へとつながっていくのか」



「越後屋はどのような商売の方法で人々の心をつかんだのだろうか」



検証Ⅰの考察

抽出生徒Aは，学習課題を提示したことにより本時の課題が明確となったことや，興味が喚起されたことで，本時の学習を普段以上に集中して取り組むことができた。普段は，どの授業にも自ら進んで取り組むような意思は感じられず，受け身になってしまうことが多い。意欲的に取り組んでいると感じられるのは，自分のわかる内容で自信がもてる場合などである。以前は，文章でまとめる活動では，人が書いたものを写す，答えを確認し合うまで何もしないという姿が見られた。九十九里でのイワシの水揚げと衣類の変化については，資料集から自分で言葉をまとめあげ，端的にわかりやすく説明することができた。江戸時代のリサイクルについても，学習課題をしっかりと考え，文章にまとめあげることができた。普段の授業では，学習課題に対するまとめになっていない生徒もいる。今回，学習課題が明確で具体的だったことで，抽出生徒Aは何をやるのか見通しをもてて最初から授業に臨めていたと考えている。

抽出生徒Bは，教師主導の授業では，友達と話をしてしまったり，机にふせてしまったりなど，なかなか集中して取り組むことができない。今回の授業では，普段とは違い非常に意欲的に取り組んだ。“集中力のない生徒，意欲の低い生徒”という目で見てしまっていたことに大いに反省した。文章は相手に伝わるように書くことができており，わかりやすくまとめられている。ノートを見ても，何度も書いては消してを繰り返し，本人が資料集を見て，よく考えて文章を構成したことがうかがえる。授業に取り組む様子やまとめた文章から，学習課題が本人にとって興味・関心を喚起するものであったと思われる。

検証Ⅱ　生徒アンケートの変化からまとめあげようとする意欲は向上したか

【事前】学んだことをまとめることができますか		
選択肢	人数	割合
1．得意である	4名	25.0%
2．まあまあ得意である。	4名	
3．ふつう	１０名	31.2%
4．あまり自信がない	8名	43.8%
5．苦手である	6名	

【事後】今までの文章でまとめあげる活動を通じ，現在のあなたの文章でまとめあげることへの意識として，最も近いものを選び，○をつけてください。		
選択肢	人数	割合
1．得意と感じられるようになった	7名(22.6%)	54.8%
2．やればできると感じられた	１０名(32.2%)	
3．特に変わらない	4名(12.9%)	12.9%
4．少し難しいと思った	8名(25.8%)	32.3%
5．大変難しい	2名(6.4%)	

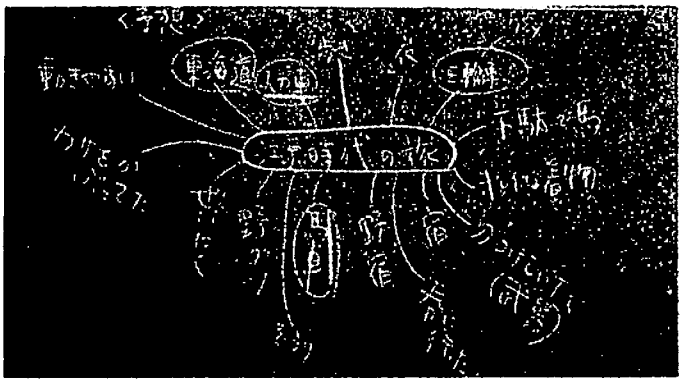
検証Ⅱの考察

事後アンケートの結果によると，約５５％，学級の約半数以上の生徒が，今回の取り組みにより，文章でまとめあげる活動を得意と感じられるということであった。最初に行ったアンケートで，「学んだことをまとめることができますか」の回答で，「得意である」「まあまあできる」と答えた生徒は８名であった。授業後のアンケートでは，「得意と感じられるようになった。」「やればできると感じられた。」と答えた生徒が１７名へと増加した。得意，やればできると感じている生徒からは，「資料などから重要な部分を探して書けるようになった」「フィッシュボーンでまとめてあったので，文章にするのもあまりてこずらなかった」「以前に比べると，まとめることが苦ではなくなった」等の感想が見られた。

しかし，「難しい」と答えた生徒は約３２％となっている部分がある。この原因としては，１つ目としては，検証Ⅴで後述するが，教師の評価としては十分に評価できると思っていても自己評価が厳しい生徒がいる。この課題においては，どのような規準で評価するかを改めて明確にし，それが到達しているかを教師が認知し，生徒自身が自分を認められるようにしていきたい。２つ目としてフィッシュボーンから必要なワードを取捨選択することはできたが，どのような言葉で繋いでいけばよいか迷ってしまったようである。この課題においては，国語科との関連も大切にして，スムーズに表現できるようにしていきたい。

検証Ⅲ　予想時のイメージマップの活用による意欲の変化

「“旅の始まり”と呼ばれる江戸時代。
江戸時代の旅はどのようなものだったのだろう」



【イメージマップでの予想の立て方】

クラスの出席番号奇数生徒が起立
（次の授業では偶数など変化をつける）

↓

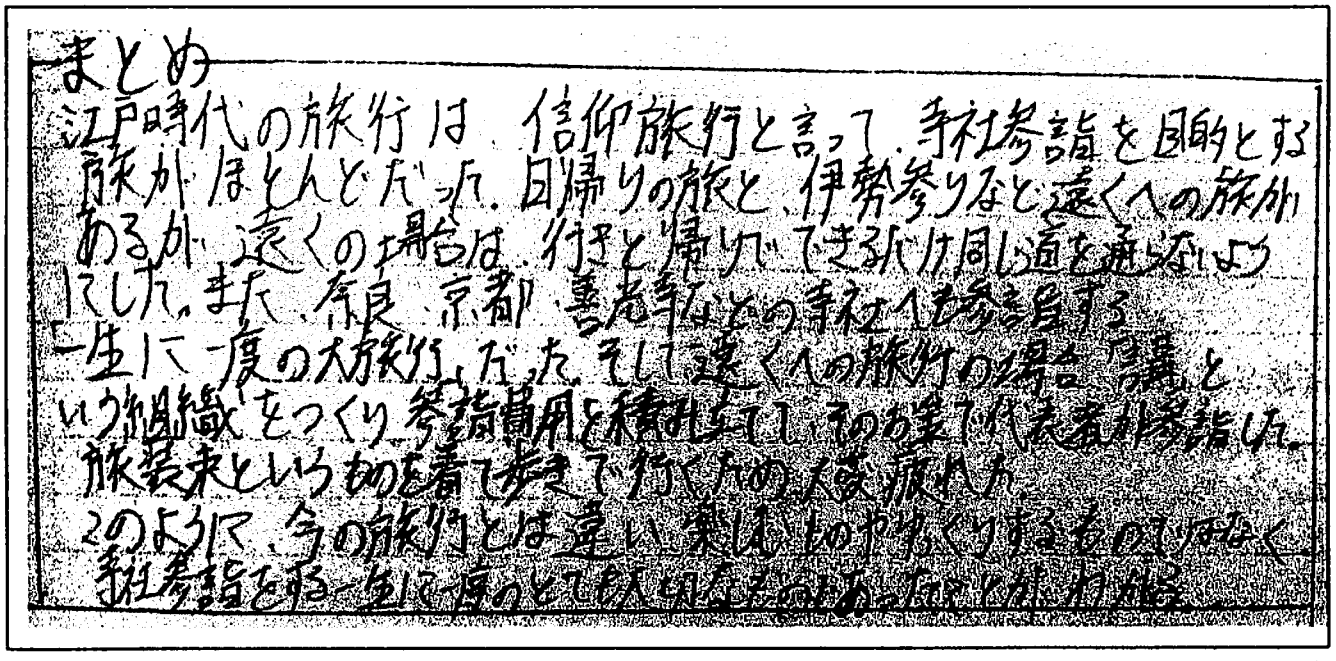
手をあげ，自分の思いつくものを発表する。発表した生徒から着席。

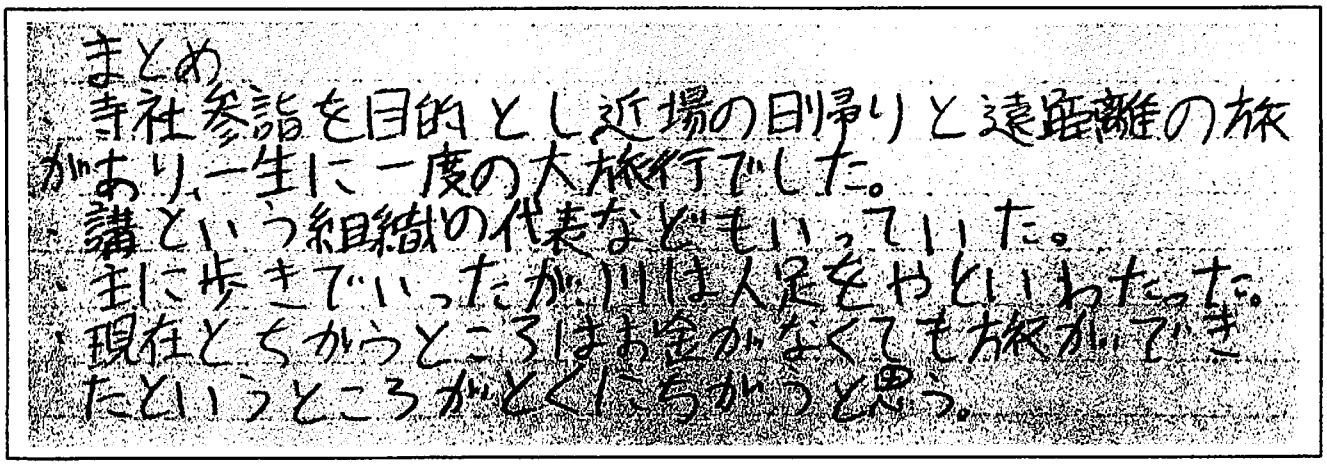
↓

立っていた生徒全員が発表してから，付け足すものがないかなど，全体に投げかける。

検証Ⅲの考察

旅について，資料集をもとにまとめた。多くの生徒が予想に参加し，まとめあげる段階でもほとんどの生徒が取り組むことができた。授業の導入で自分の考えを発表する機会を設けることで，承認された感覚を持った生徒が増え，意欲的に取り組めるようになっていった。その結果，まとめの活動でも熱心に取り組む姿が見られるようになった。


まとめ
江戸時代の旅行は、信仰旅行と言って、寺社参詣を目的とする旅がほとんどだった。日帰りの旅と、伊勢参りなど遠くへの旅があるが、遠くの場合は、行きと帰りでできるだけ同じ道を通らないようにした。また、奈良、京都、善光寺などの寺社へも参詣する一生に一度の大旅行だった。そして遠くへの旅行の場合、講という組織をつくり、参詣費用を積み立てしたのち、講で代表者が参詣した。旅装束というものを着て歩いて行くための大変服装だった。
このように、今の旅行とは違い、楽しむものやかくりするものではなく、寺社参詣を一生に一度のとても大切なものであったのだと分かった。

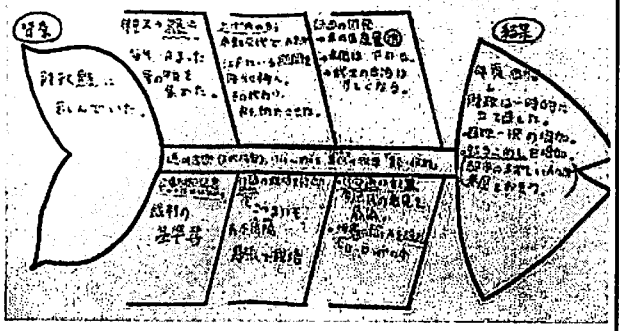

まとめ
寺社参詣を目的とし近場の日帰りと遠距離の旅があり、一生に一度の大旅行でした。
講という組織の代表などもいっていた。
主に歩きでいったが川は人足をやといわたった。
現在とちがうところはお金がなくても旅ができたというところがとくにちがうと思う。

仮説２の検証

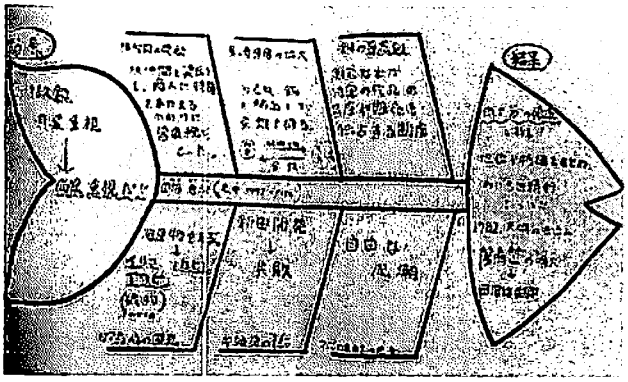
歴史的事象と歴史的事象を関連づける授業手立てを工夫すれば，思考が整理されまとめあげる力が育つだろう。

検証Ⅳ　フィッシュボーンがまとめあげる力の向上に効果的であったか

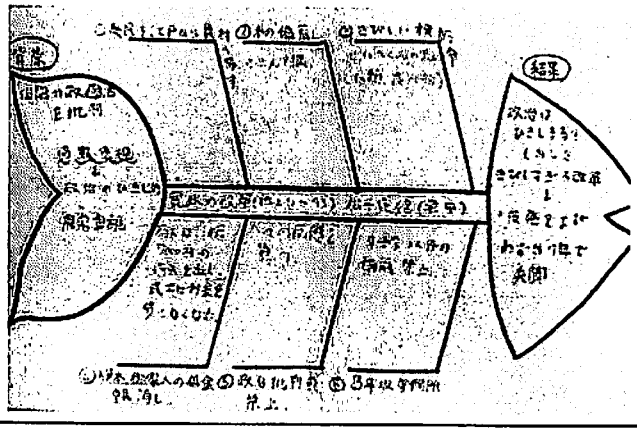
徳川吉宗の享保の改革　一斉授業

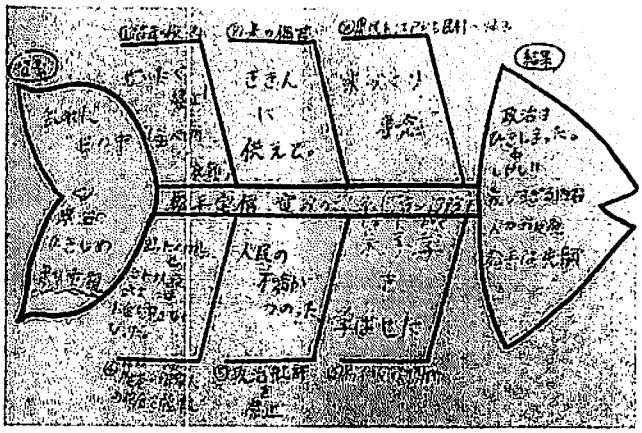


田沼意次の政治　授業者が政策を書き，その内容は調べて記入

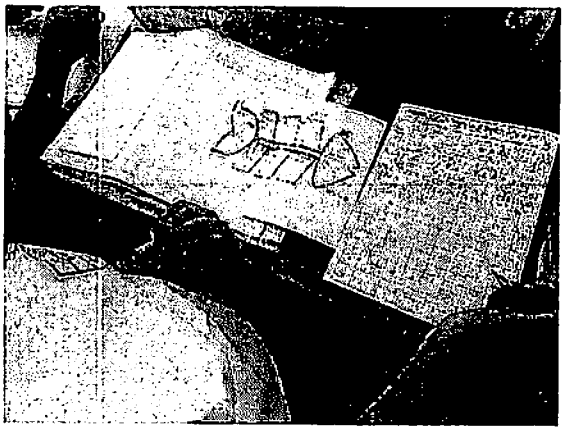


松平定信の寛政の改革　個々で調べて記入





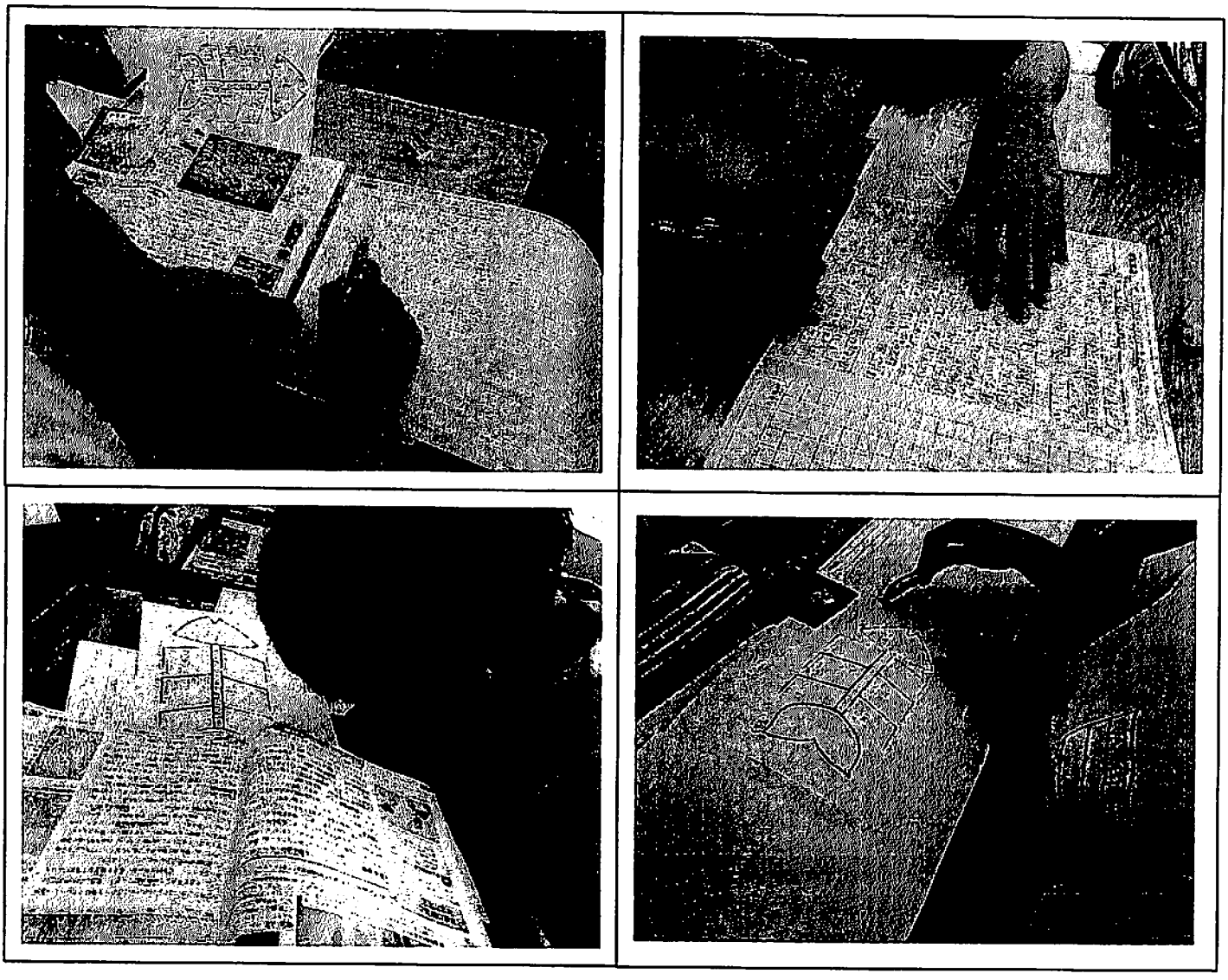
検証Ⅳの考察



思考ツール・フィッシュボーンを使用し，徳川吉宗，田沼意次，松平定信の政治についてまとめていった。享保の改革を学習する際は，教師主導でフィッシュボーンに改革の内容を記入し，説明とともに生徒も記入していった。田沼の政治では，行った政策のみ黒板に書き，自分達で内容は記入させた。寛政の改革は，教科書，資料集を使用してまとめた。

そして，まとめの学習として，「なぜ，幕府は，元役人が反乱を起こすほど，信頼を失っていってしまったのだろうか？吉宗，田沼，松平の行った政治からその背景をまとめよう」という学習課題のもと，教科書，資料集，フィッシュボーンを使用し文章にまとめていった。

教科書や資料集とともにフィッシュボーンを使用してまとめあげていく生徒もいれば，フィッシュボーンから端的にまとめあげていく生徒もいた。

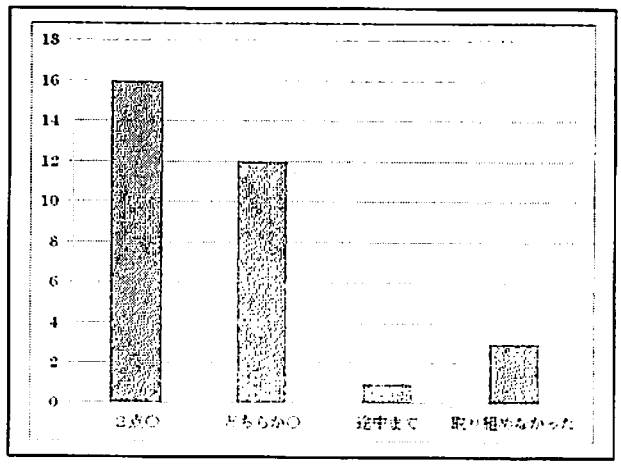


フィッシュボーンからまとめている生徒は，資料集や教科書からまとめあげている生徒よりも，わかりやすく端的な文章で表現することができた。また，教科書，資料集を使用している生徒もフィッシュボーンでまとめた内容に資料集などから細かい知識をつなげ，文章をまとめることができた。授業内でまとめあげることができた生徒は，どのクラスも３０名程度で４名くらいが書き終えることができなかった。そこに反省は残るが，多くの生徒が平均して６００字ほどでまとめることができた。

検証Ⅴ　一人ひとりのまとめより，まとめあげる力が高まったか

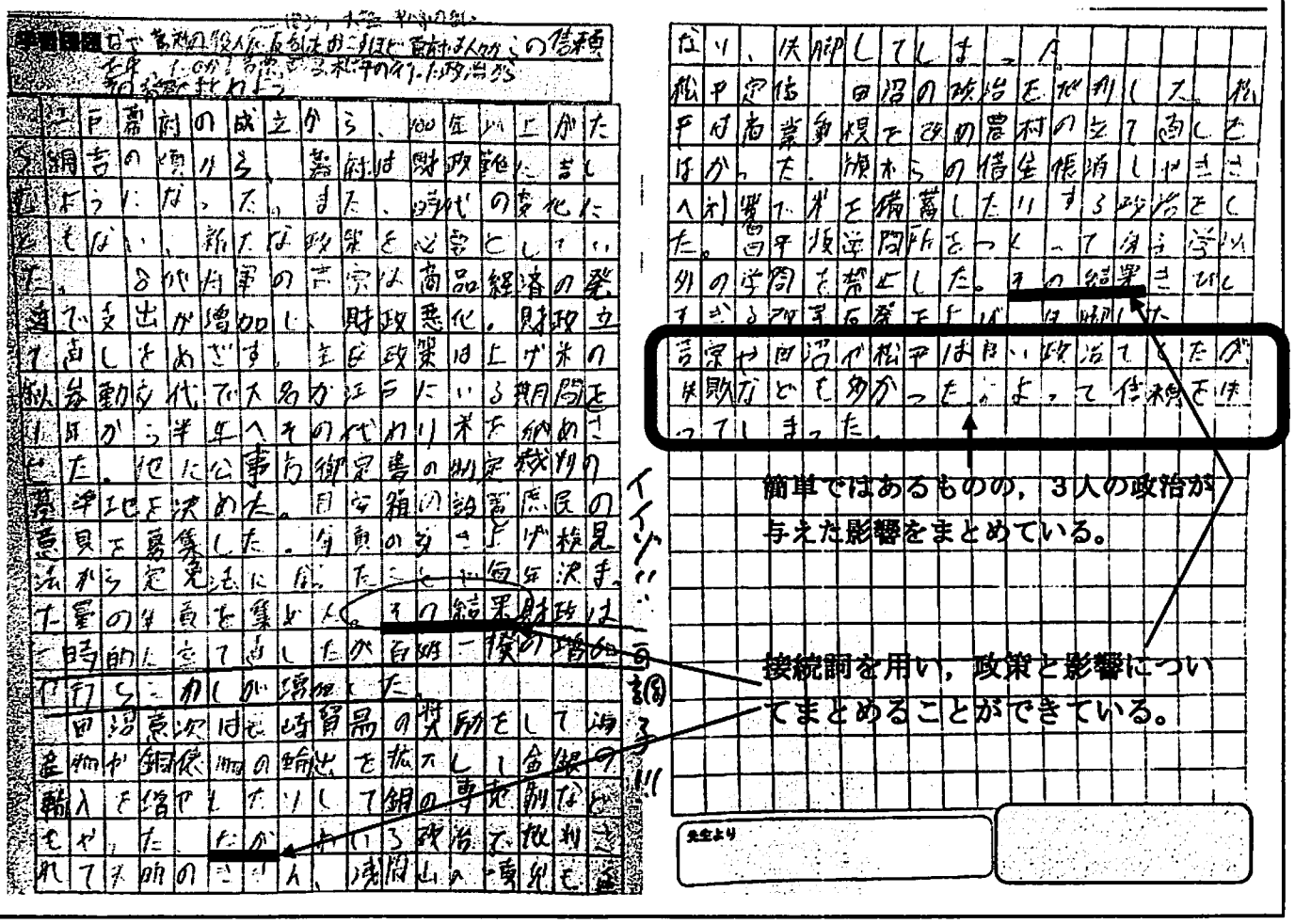
どのクラスもほとんどの生徒が，授業で取り組んだフィッシュボーンを中心に教科書，資料集で言葉を足していく。

まとめあげることができたと認める要件として，２点をあげる。①３人の政治の政策，内容を書いてある，②それぞれの政治の与えた影響，評価が書いてある，この２点を満たすように指導をし，授業をスタートした。２年３組において，２つを満たしているのは，１６名，クラスの半数くらいであった。どちらか１つが抜けている生徒が１２名，途中で終わってしまった生徒が１名，なかなか取り組むことが難しかった生徒が３人であった。



抽出生徒C

受け身の姿勢で授業に参加。書くことに苦手意識はないが，知識が定着しておらず，定期テストなどの論述問題では，書いてはあるが正解には至らない。テストの点数も平均点を下回る。



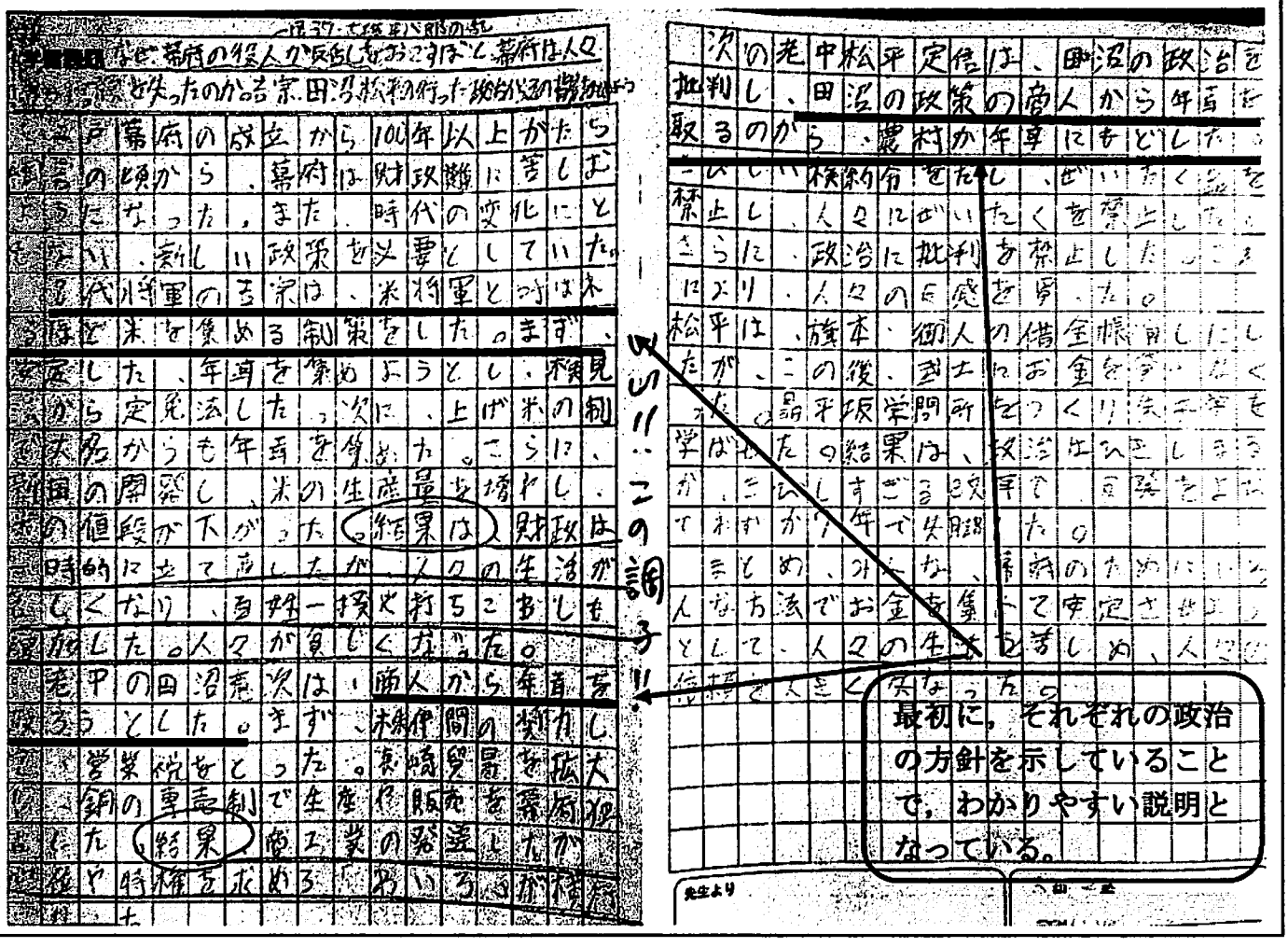
抽出生徒Cは，アンケートで「武士が政治の中心となったのはなぜだろう？」では「ひまで男の人がやってみたいことだったから」，「なぜ，江戸時代，オランダとの貿易は“出島で行うこと”と制限されたのですか？」では「危ないものが勝手に入ってきたりしないため」と答えている。考えて書くことはできるが，知識が乏しく歴史的事象を結び付けることができていないため，自分の想像だけで文章を書いていた。特に書くことに苦手意識があるわけではなく，テストでも積極的に答えている。しかし，なかなか正答には至らない。おそらく，じっくりと考えて取り組むことができていないと考えられる。

今回は，フィッシュボーン，教科書を参考に直近の授業で学習したことなので，知識が整理され覚えている状況である。また，最初に，まとめあげる要件を２点伝えたことで，それを意識して書くことができた。何もない状態では，もちろん文章でまとめあげることは難しい。しかし，しっかりと学習をし，まとめる際に参考となるものがあれば，わかりやすくまとめあげることができている。

テスト等では，教科書や資料集を見て解くことはできない。自分で学習したことを整理し知識を定着させ，歴史的事象と歴史的事象を結び付けて書けるようにならなくてはならない。今回，何が大切なのかを考え，歴史的事象を結び付け，その影響についてまで考えてまとめあげることができたのは，抽出生徒Cにとっては，初めての経験であったと思われる。本人も事後のアンケートで，文章にまとめあげることについて「やればできると感じられた」と答えている。

抽出生徒D

授業は受け身。書くことが苦手。生活記録ノートなど，文章を書くことを嫌がる傾向にある生徒の一人。テストは平均点くらいである。



最初に，それぞれの政治の方針を示していることで，わかりやすい説明となっている。

抽出生徒Dは，文章でまとめることは苦手と答えており，普段から作文や，個人新聞，生活記録ノートなどにおいても，なかなか文章を書こうとしない。本人は，「何を書けばよいかわからない」「書くことがない」と言っている。社会科のまとめる取り組みと，他の文章を書く取り組みを単純に比較はできないが，今回は，何を書くのかが明確であり，参考とする資料もあったため，まとめやすかったと思われる。また吉宗，田沼，松平の大きな政治の方針を，最初に書くことで，非常にわかりやすい文章となった。「8代将軍の吉宗は，米将軍と呼ばれるほど米を集める政策をした」「老中の田沼意次は，商人から年貢を取ろうとした」「次の松平定信は，田沼の政治を批判し，田沼の政策の商人から年貢を取るのから農村からの年貢に戻した」など，教師がヒントを出したわけではないが，このように書くことができた。商人からは“年貢”ではないので，間違いもあるが，わかりやすくまとめることができた。

抽出生徒Cと同じで，文章に書くことを嫌い意欲が低いと思っていた生徒が，このようにまとめあげたことで，今まで教師の一面的な生徒の捉え方に反省せねばならず，取り組みをたえず工夫していかなければならないと思わせる生徒の一人であった。

検証Ｖの考察

9　成果（○）と課題（▲）

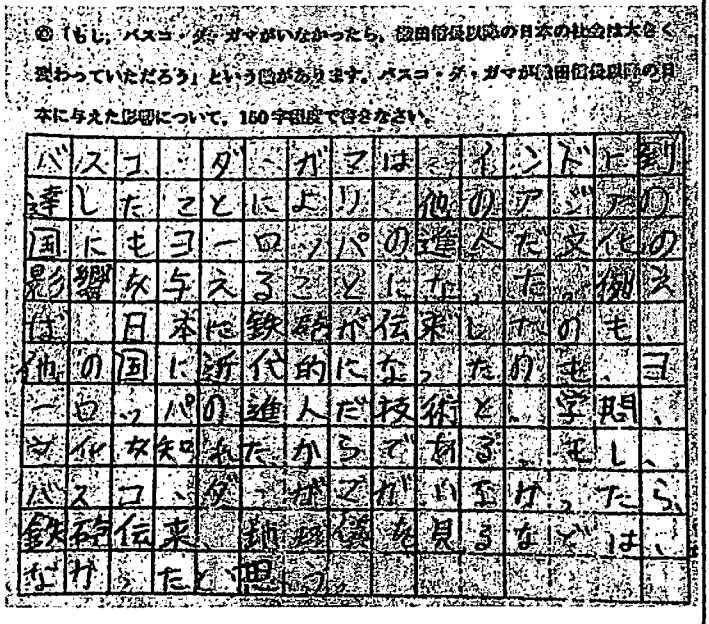
○　学習課題の工夫や思考ツールの活用などさまざまな手立てのもと，文章にまとめあげるという取り組みを繰り返し，文章を書くということに対し苦手意識が克服された生徒もいた。苦手意識はもっているものの，どの取り組みにも真面目に取り組み，吉宗，田沼，松平のまとめもほとんどの生徒が書きあげることができた。

今回の単元のまとめの授業で，２年生の１学期で学習した歴史，ローマ帝国の繁栄から江戸時代の外国船の出現と天保の改革までを復習した。その後，ちばのやる気ガイドに載っている

“「もしバスコ・ダ・ガマがいなかったら，織田信長以降の日本の社会は大きく変わっていただろう」という論があります。バスコ・ダ・ガマが織田信長以降の日本に与えた影響について１５０字程度で書きなさい。“

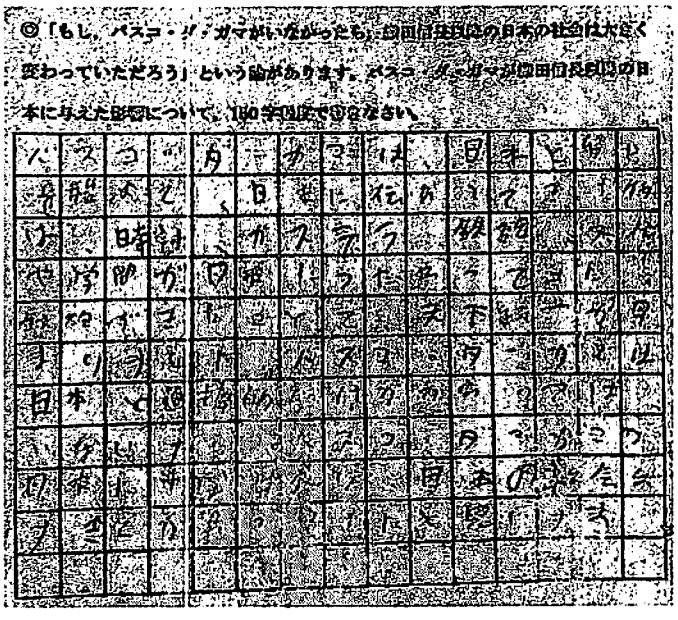
という問いに取り組んだ。復習をした後とはいえ，学級の約７割の生徒が，バスコ・ダ・ガマが日本に与えた影響を歴史的事象と歴史的事象を結び付けて説明することができた。多くの課題は残るものの，学習した内容を結び付けてまとめあげることができた生徒が多く，今までなら全く書こうともしなかった多くの生徒達が，自分で考えて書くことができるようになった。

生徒Ｆ　まじめで主体的に授業に参加。


◎「もし，バスコ・ダ・ガマがいなかったら，織田信長以降の日本の社会は大きく変わっていただろう」という論があります。バスコ・ダ・ガマが織田信長以降の日本に与えた影響について，150字程度で書きなさい。

バスコ・ダ・ガマは、インドに到達したことにより、他のアジアの国にもヨーロッパの進んだ文化の影響を与えることにもなった。例えば、日本に鉄砲が伝来したのも、他の国に近代的になったのも、ヨーロッパの進んだ技術と、学問、文化が知られたからである。もし、バスコ・ダ・ガマがでがいなかったら、鉄砲伝来、鎖国等を見るなどはなかったと思う。

生徒Ｇ　寝てしまう，板書を写さないなど，取り組む意欲は低い


◎「もし，バスコ・ダ・ガマがいなかったら，織田信長以降の日本の社会は大きく変わっていただろう」という論があります。バスコ・ダ・ガマが織田信長以降の日本に与えた影響について，150字程度で書きなさい。

○　文章にまとめあげる活動を通し，「自分で考える」ことができる生徒が多くなった。最初は，まとめることに対しての意欲の低さを感じることが多く，手をつけようとしない生徒が学級の半数以上いたり，早く時間が過ぎるのを待っている様子であった。しかし，書くことができた生徒の内容を紹介したり，書くための支援を入れることで，書くことに慣れ，学級のほとんどの生徒が手を動かし集中して取り組むという環境がつくられるようになった。文章を見ていても，接続詞の使い方，どのように歴史的事象をつなげて説明していくかなど，生徒達が思考している様子が見てとれる。

今までは，受け身の授業で知識を与えられており，思考する問題であっても暗記して定期テストに臨むという生徒が多かった。ワークに載っていないような論述問題を出すと，途端に書けなくなってしまっていた。すぐに人に聞いたり，書こうとしない生徒が多かったが，自分で考えて取り組んでいる姿が多くなった部分は大きな成果だと考えている。

○　四部会社会科の組織的協力もあり，他校の生徒の実態をつかむことができた。また，多くの実践から「まとめあげる力」の重要性を感じることができた。今までは，本校の社会科部会のみで授業の検討を行ってきたが，お互いに実践を紹介したり，授業を参観したりすることが，取り組みや方向性を考える大きな参考となった。今後も，市内の小学校，中学校との連携をさらに深めていきたい。

▲　ほとんどの生徒が多くの授業で文章にまとめることができたが，事後のアンケートの結果を見ると，得意と感じられた生徒は大きく増えたわけではなかった。アンケートで，「文章にまとめあげることは難しい」を選んでいる生徒は，「文章をまとめあげることが得意になった実感がないから」「テストで書けるかはわからない」等の感想を書いている。興味や関心を喚起しきれなかった点や，書けた生徒がほとんどであったのに，まとめあげた実感を味わわせることができなかったことを反省し改善していかなければならない。

まとめあげた実感を得られなかった原因は，ただ写すだけになってしまい知識の羅列になってしまったことだと考える。知識を書くだけではなく，自分で資料を精選したり，級友の意見を聴き，自分の考えを深めていくことで，まとめあげる意欲も高まり，まとめあげた実感が得られるようになる。学習過程の「見出す」「調べる」「深める」「まとめる」の４課程の中の「調べる」や「深める」活動が希薄になってしまった。「深まり」を高めるため，今回の取り組みを反省改善しながら，残りの歴史や地理でも継続して，まとめあげる活動を行っていきたい。３年生の公民では，他校の実践から「対立と合意」「効率と公正」に着目して，話し合い活動を積極的に導入していく。その中で，他人の意見を聞き合い，「深まり」を高め，「まとめ」あげ，「まとめあげる力」をつけさせていきたい。